

棚上の物落つる程度に過ぎず。

一、新井田川附近鮫、白銀方面は人々避難す。

一、蕪島鮫町に架しある八戸築港工用橋梁は流失す。

一、八戸港碇泊中の汽船二隻の中一隻岸壁に衝突し損傷あり。

一、新井田川湊川口。午前四時十分又は二十分毎に大浪湊川に押寄せ碇泊中の發動機船、小舟、舢舨等を河上に押流せる爲河堤又は漁船相互に衝突し別表の通り損害を生じたるも、河堤に沿ふ道路面には氾濫せざりき、八戸市中家屋としての被害著しきは白銀海岸の三島湧水を基點とし小川に添ふ地點にて土地の比較的低きと地形百二十度以上外に開きたる奥に位置する爲汀に迫る波浪は相重疊して破壊力を増したる程度なり。ウネリの如き波状をなして襲來するに先立ち海水一時引き然して鳴動しつゝ寄する波高は平素の風波に倍し、水産學校北寄の汀の崖上にある建物に残せる波浪の跡(別紙寫眞参照)は海面より、四米を計測せり湊より鮫に到る海岸は隨所に難破船散見す。

一、湊(柳町在住某氏談)地震直前に北東方より地鳴あり、地震後三十分位にて水が河へ逆流し一回目二回目は十分位の間隔にて第三回の波の襲來は増水四、五尺一般風浪と異なり、

水勢速強なる爲船舶の被害甚し、明治廿九年の海嘯より水嵩低く浸水域狭小なるも海嘯としては以前より強き様思ふ由古老の談あり。この符號せざる點は河川改修工事等の施行せられし爲か不明なり。

一、湊觀測所にては最高波浪の起時は午前四時二十四分にて底鳴りドロ〜と聽取せられ八、九尺水引きたる後に現れたり。一、埋立地コンクリート岸壁の海岸に直交せる所鮫漁業組合事務所ありて岸壁に激突せる余勢の爲め大破せり。

被害調。

湊濱須賀。住家浸水二三戸。磯舟流失九。非住家浸水二四戸。同破損

二三。發動機船破損二七。×粕流失四七、〇〇俵。

鮫。發動機船流失一。住家破損七。納屋破損四。磯舟流失四。非住家破損一二。棧橋破損三。築港機械二萬圓程度。

市川村。濱市川(二十尺)床上浸水二戸。床下浸水三戸。非住家屋倒壊

四戸。人畜被害なし。

百石町、

一川目。浸水家屋十戸。破損家屋八戸。漁船破損一〇戸。

川口。死亡(小兒一名)倒潰家屋一戸。

二川目。住家破損一。住家浸水三。非住家屋流失二。同破損三。非

住家浸水三。人畜被害なし。

三澤村。

四川目。死亡六名。家屋流失十戸、行方不明三名。家屋破損三戸。重傷者七名。非住家屋流失八戸。輕傷者七名。非住家破損六戸。三川目。戸數約百十戸人口七十五名。流失家屋十六戸。死亡二十名。重輕傷者三十一名。

四川目明治二十九年の海嘯。

地震前二三日前に大砲の如き音響があり。舊端午の宵節句午後八時頃地震あり。今次のものより弱く(弱震程度)感じたるも震動時間長く一時間後に海嘯あり。見あげる様な波頭が明る光つて汀より百間と覺しき邊に折れ返り言語に絶する大音を發せり其波勢猛烈にして汀より六十間乃至百六十間にある部落の人家に殺到し柱のボキ〜折れるを目撃せり。第一波後十五分位にてより大なる第二波來り十分後位にて第三最強波襲來せり(地震後一時間位)尙流失物の小川を逆上し汀より十四丁位の字下堀玉泉寺より二町位下手迄漂着したるも今回はその半に及びたるに過ぎず然れ共これは前回の六月なるに比し氷雪固く河筋を閉し居れば直ちに強弱を速斷し得ざるも今次の海嘯は弱かりし如く想像せりと言ふ、尙この海嘯に先たち湧水井水の著しく減少せるを認めたる由なり。前海嘯の際は漁類の漂着夥しきものありたるも今次の海嘯には皆無なりしと言ふ。

四川目。地震々動中大砲の如き音響ありこの音は古間木方面にまで聞え又南方の空に映りたる光を見たるが深夜なる爲川添ひの家に僅に河水のジブ〜する騒音を氣付たる程度にて地震後一時間位にて北方より地鳴の音と同時に空にとどく様な眞黒きもの進んで來る様に見え急に白く光つて間近く押し寄せたるが海嘯の方向は東南東の如く思はれ水勢は廿九年より可成弱かりき。

四川目三浦勝司郎氏談。

ジャー〜と雪面を流るゝ水音を家内が見覺め呼び起されて窓外を見たるにあたりは既に海水に圍まれ間近二十五尺位の大浪近づくを見夜明けかと思はせん程に波頭の飛沫物凄く光りて殺到するに驚き子供を抱いて屋外に出でんとせしも時既に遅く浪と流舟の爲め潰れ直ちに家屋浮き上りたるがその際木羽葺の家根に穴あきたるを幸ひ屋上に逃れ漂流中救助せられたり(同氏宅は汀より七〇間位に所在せり)三川目に於ける廿九年の海嘯古老談(圓子定吉氏談)釣り下げし石油ランプが上下に長く揺れて三十分間位後に堀へ海水の流入するを見海嘯あることを知れりこれより十分後に第二回目の波ありて邸内へ罎のメ粕海水と共に流れ込みたり、これより約二十

五分後見上ぐる如き大浪押寄せ波頭の飛沫物凄く躍りて光り映えこの日霧深く暗き夜なりしが陸へ逃げ上るに足もとの見える位にあたりを明るく照したるが一大音響と共に波が折れ約三分後と思ふ頃部落の家屋其の他の破壊さるゝを聞いた。水勢は甚だ激烈にして鯛ノ粕製造用の篩胴(砂中四尺の深さ迄埋め抜ける様十文字に棧を打ちつけたるもの)が流れたるに徴し想像し得べく又波の引去りも極めて迅速なりき圓子氏宅は汀より約二百間なるが浸水床上約四尺三寸屋内床上四五尺の浸水にして床の壁面に残る廿九年の海嘯による修繕の跡より一尺以上高きを認めたり。三月三日の海嘯地震後南方に放射状の光映を認め又地震後十分位にて北方に大砲の如き音を聞けり。波音一時風き北方より早手が来たかと思ふ海嘯が聞え五分間位にて薪を浮べたる海水進入し海嘯なることを知りたり。時に地震後一時間位と思はる。

二川目。(松尾石造氏談)地震々動中南方の空に映光ありて西へ靡きたる様見受けられたり、又南方にあたりて遠方の爆發する如き音響を五六回聞きたるが警戒のため川に下りて見るに二尺位増水せる跡雪上であり第一回の波跡と思惟したるが時刻は地震後三十分位にて後「ジャー〜」第二回の波が前よ

りも少しく高く来り十五分後に第三回目の最大波来り廿九年に浪の爲柱の折れし被害家屋(木村吉三郎氏宅)に三尺浸水ありたるのみなり。海嘯は波高は約十尺と推定せり。河水は七八尺の増水ありたり。尙河水を警戒中二回目の浪の襲来を認め半鐘を打ちて部落を警戒し濱邊に下ることを禁じた爲め人畜の被害皆無となれり。

階上村大字道佛宇大蛇二一七中田寅吉氏談、地震後三十分海嘯あり十五分後に第二回目再び十五分を経て第三回の大浪襲来せり海嘯は三回目が強きと聞き海岸に立ちて沖を警戒中午前四時頃暗夜なる爲展望狭く突如空を見あぐる如き(波高三十尺位か)津浪北東方よりのめきて鳴動襲来汀より凡百間の距離に到り波頭に閃光を發すると同時に百雷に勝る大音響を伴つて波は急に崩れたるも雷鳴と異なり寧ろ折れ反る如き様にて破裂すと言はゞ至當ならんと思はる。部落の汀線は北々東——東南東に交はり被害はこの交點附近及少しく北偏せる所の丘を打越えて傾斜地を陸へ向つて流下せし所に大なり。右の日撃者は東南東の汀線に立ちて警戒中の實語なるが前記交點附近に立ちて警戒せる者に依れば小祠ありて前海嘯には異常なかりしが今次の海嘯にては丘は殆んど水に掩はれ丘に

避難せしものは僅かに大地に立ちたる柱に木登りて免れ小祠は流失して影を止めざりき。又海水殺到急激なるに比し退水遅かりしと言へり。之を要するに廿九年の海嘯より大なるものと思惟せらる。

榊部落民の談、榊部落は北東に開けたる山間にあり地震後三十分にして海嘯あり約十五分置きに三四回(三回目最高)襲来あり海の底鳴と共に水位のみ高まりて波浪なかりき。階上村。

追越。家屋流失一。同破損三。非住家流失七。同破損二。小舟流失三〇。残り四隻。死傷なし。
 榊。非住家屋流失九。小舟流失三〇。非住家屋破損三。同倒潰九。發動機船流失一。捲網船流失二。人畜死傷なし。
 小舟渡。流失納屋十一。倒壊納屋六。發動機船流失五。小舟流失約四〇。人畜死傷なし。

下長苗代、市川、百石、三津の各町村は明治廿九年の海嘯により砂濱より幾分高き地點を選び移動したるものなるが淋代鹿中五川目細谷織笠鹽釜等二町乃至三町部落の中心移動せり。然るに四川目三川目の流失家屋は以前海嘯の流失區域にありしもののみなり。以前の海嘯にて邸内に海水浸入したるも五尺盛土

せる爲全く被害を免れたる者四川目にありたるが海岸より百三十分位に所在せり。一般に深夜なる爲海嘯に關する供述不明なるも各濱を通じ前海嘯の浸入せる所迄来らざりし如く推測せられ流速も前回に比し進退共に遅かりしものと認めらるゝことは積雪ある爲ならんとの意見もあれど是非は速断し得ざるものあり。尤も階上村大蛇は地勢上積雪の影響殆んど無視し得る所なる前回に比し確かに海嘯の大なりしを確認し得るものなれ共各海嘯の特徴發現點の方向變化による被害地の相異等を考慮すれば小數の強かりし被害地を以て遽に断定し得ざるものあり。

寫眞説明 三月三日海嘯被害實況(口繪寫眞自八十七圖至第九十五圖)

- (1) 三戸郡階上村大字小舟渡。
 同部落東南東方岬の北西側にして中央人物の足元の雪面が微かに灰色を呈する線を見る之の線が津浪が押し上りて白雪を汚せしものにして海面上約五米。
- (2) 同郡同村同部落。
 中央人物の後方の家を押し流す尙人物の(向つて)右側白雪に汚線あり之津浪の跡なり。
- (3) 同郡同村同部落。
 正面人物の足元迄の津浪なり。明治二十九年津浪の際は正面納屋より高き波浪ありしと言ふ。

(4) 同郡同村大字追越。

正面住家の硝子戸腰板の高き迄の津浪あり之を海面上より簡單測量をなすに三米餘なり尙此の波浪は戸障子を破り住家裏の崖(屋根の後に白雪を見る)に押し寄せり。此の點の高き約七米なり。

(5) 同郡同村部落大長岬の北岸。

前面舟置場迄波浪押し上りたるも流失に至らず同岬北岸は割合に潮高は低かりし由。

(6) 同郡同村大字大蛇。

本縣被害部落中三澤村三川目及四川目と共に最も被害多き所にして海面上三米餘の住家を倒壊せしめし所後方白雪ある崖上は家屋附近より五米位の高所にして老幼婦女子は凡て此の崖上に避難せり。

(7) 同郡同村同部落。

前面に板片を横へるは道路(海面よりの高さ二米半)にして其の上段は家屋跡にして此の附近満足なるものなし前面電柱は根元より「ボツキリ」と切斷せらる津浪の押し寄する力推して知るべし。向つて右方電柱の上方白雪の消へし個所迄押し寄せたり。

(8) 三戸郡下長苗代村北沼附近。

向つて右方白雪のある砂洲(スカ)は海面より二米内外高く八太郎沼東方より海岸線に沿ふて北上せり。砂洲は海岸より三百米乃至四百米あり砂洲迄一帯に押し寄せたるも寫真左方の如く砂洲なき所は著しく陸方深く押し入り海岸より五百米押込みたり。左前面の沼に張り詰めたる水は苦もなく破壊せられて四散せり。此の水の厚さは三月八日に至るも二十種餘あり當時の厚さは恐らく三十種以上と思惟す。

(9) 上北郡百石町大字二川目。

中央標木は明治二十九年當時部落の中心地にして殆んど全滅に遭ひ其の後官有地の交附を受けて高地に移轉し今回の被害極めて僅少なり、左方砂洲は海面よりの高さ三米に及ばざるも之を越す波浪はなかりし模様なり。(標木は前回津浪の遭難念紀碑なり)

昭和八年三月三日地震津浪調査報告(其ノ二)

青森測候所

階上村

小舟渡。地震後三十分餘にして「ゴロゴロ」と石を轉ばすが如き音響を立てつゝ退水し平常の三倍の干潮となり四五分後第一回の高潮となり十五分乃至二十分を隔て、襲來し第三回最も高く潮高目側十五尺に達せり。退水の際の音響は海岸より遠ざかる程良く聞へ二三里奥地に於ては遠雷又は砲聲の如しと言ふ。明治廿九年に於ては今回より潮高も高く二十尺と稱せられ被害多かりしも其後家屋は高所に移轉したる爲殆ど人畜に被害なく舟と家の流失あり舟の流失は四十隻に及ぶと言ふ。津浪の襲來方向は北東方より來り震央は北東なりと思ひたる由にて地震の性質は水平動餘り感ぜず床下に於て浸水したるが如く「ムクムク」と持ち上げられたる如く感じ平常の地震と餘程異なり廿九年の津浪の際の地震と其の性質似たるを以て津浪の豫感をもちたる由なり(以上小舟渡小學校長談)。

追越。本部落中田清助氏宅前は最も津浪の根跡を止めあるを

以て海面より簡單測量をなすに最大潮高は同家前道路を〇、五米位乗り越へ家屋を突き破りたるを以て此の潮高は六米餘海水の押し込みし所迄は實に七米四の高所に及べり。當部落は南東方に大長岬あるを以て幾分津浪の勢力を減じたりと言ふも津浪は汀線に直角に向ひ押し寄せ大長岬の北岸を洗ひ東方に引きたるを以て納屋の流失するものありと言ふ(以上中田清助氏談)。

大蛇。追越大蛇兩部落中間丘上にある小學校より見るに最高潮は校庭下の道路(海面より約二米五)上を〇・五米位を以て越へ其餘勢は斜面に沿ふて海面上約七米近く押し上りたる根跡を見るも最高潮の高さは三米餘と思はれ大蛇に比して低潮なりしは沿岸正面に雄島雌島がありて防勢したる爲ならんかと言ふ(以上大蛇小學校長談)

階上村附近に於て最も被害多きは實に本部落にして明治廿九

年の津浪より遙かに大にして人命の損失家屋の倒壊流失漁船の流失破壊多く殆んど全滅の有様なり。當時の様相を聞くに上下動地震後第一回の高潮三時半頃かと思はるゝも大なる被害なく

昭和八年三月廿二日午前二時三十分頃、地震
ニ於てハ青森県宮内郡瀬川町
有徳分布図



引續き十分乃至二十分に第二回の波浪來り宅地前方(北東方)道路(海面上約四米)附近に來りたるを以て婦女子老幼等は南西方高地に避難せしめ若者は家屋漁舟等の管守保護に努めつゝありしとき俄然高浪に押付けられ、或者は負傷し或は沖合に押し



階上村大字邊佛宇大蛇
浸水区域之圖

流され家屋は潰滅又は流失したるものにして大浪に呑まれたるも辛じて助かりたる中田訓導の談に依れば波浪の高さは七米以上九米位と認めたる由なるも波浪の押し上げたる最高所は道路面より約二米なるを以て波浪の最高は六米以上と認めらる。本部落は地勢別圖の如く北東方に約七百米開口せる三角型入江にして其頂點に流込む小川あり此の小川の南側に家屋連なり

居りたるを以て前面より押し寄せし波浪は兩側の狹まるに連れ
て漸次潮高が高まり他の地方に比して非常の高潮となりたるも
の如く小川に沿ふて上流へ約二百五十米地點迄五間船二隻三

階上村被害

死	傷	行衛不明	計	全潰	流失	計	區別	全潰	半潰	計	損害見積額
一	一四	二	一七	五	九	一四	住家	五	九	一四	四五〇〇圓
							非住家	一七	三七	五四	
合計 六一、八五三圓											

船	發動機	機	船	其	他
五	二	三	一五〇	三二、八五二圓	一七、〇〇〇圓
破損	流失	破損	流失	以上損害	船具
五	二	三	一五〇	三二、八五二圓	一七、〇〇〇圓
合計 六一、八五三圓					

八戸市 鮫町

(イ) 地震後二十五分位にして南東方に異常音響を聞きたるも暗夜と遠方の爲海面の異状を認め得ざりしと言ふ(水産試験場無線電信所中島氏談)。
(ロ) 地震後湊河口に碇泊中の船員は間もなく(此のところ

時間不明)異常干潮を認め夫々船を繋ぎ替へて上陸し各家庭に歸り二十五分位を経て増潮を見たり第三回の高潮は四時頃と稱し居る由。第三回の高潮直前鮫にて乗船したる漁夫は間もなく大潮に乗り上げたが、其の潮高は約二米半位なりと言ふ。津浪の最も察知したるは山付の高臺に住居する人々にして之等は

後に第三回高潮を見漸時低潮となれり。潮高は海岸の砂洲（スカ）（海面上一米位を乗り越へ奥入瀬川より一米余の高地迄達したれば之れより察するに二米半乃至三米以内と認められ前回の津浪に比し稍と劣れり尙津浪後一日中異常干潮なりしも其後復舊せりと云ふ（區長工藤由太郎及代理木村松五郎談）。本部落北西方横道部落は奥入瀬川口附近低地なりしを以て海水汎濫し被害家屋を多く見る此の部落より北上し深澤部落は東方一帯に砂洲（スカ）ありて松樹植林ある爲め此れにより被害なし。深澤より一川目迄は海水三百米程汎濫したるも人家田畑等なく被害は皆無なり。

一川目。平常地震と異なり床上は余り動かず床下のみ多く動きたる感ありたる爲め前回の津浪の経験により直に津浪の襲來を豫感し海面に注意せるに地震後一時間位にして潮音一時中絶し全く静穏となれり其の後南東南方に異状音響を聞き間もなく押し寄せたるも潮高は餘り高からず前回に比して非常に劣勢なり此の附近は海岸に小砂洲（スカ）多數あつて海面よりの高さ概ね一米五乃至二米以内にして此の砂洲（スカ）の頂上を越へたる波浪なしと言ふより見れば最高潮と言ふも二米以内のものなるべし。之れを以て見れば砂洲（スカ）は或る程度迄津浪を

防止し得べく人工的に砂洲（スカ）作り得るは尙後非常に便利なるべし（立花直吉氏談）。

二川目。此度の地震は上下動を感じ床上の震動は少く床下のみ烈しく宛ら床上へ浸水し「ムクムク」するが如き感ありたれば局長夫人は前回津浪の時の地震と同じく思ひ直に津浪を豫知し局長に依頼し二川橋上に於て海面を監視し重要書類の整理貴重家財の運搬等避難準備をなし隣人をも促し夫々避難準備をすめたり。一方局長は井戸内を視たるも暗夜の爲め其變化を認めず、二川河水は三廻餘減水を見尙ほ引瀬と共に北方より異常音を聞く（尙地震と共に南より西の方の陸地方に電光の如き光を見たりと言ふも之れは其後直に停電したるより見て「シヨウト」したる時の火花ならんと思はる。

第一回高潮は地震後約三十分位第二回は時刻不明（第三回は地震後約一時間）位にして潮高は約四米位と思はれ物凄き何とも形容出來ざる音響を伴ひ津浪の尖端は白光となつて折れ返り二川筋に沿ふて北東方より來襲す、前回津浪の潮高に比して今回のものは約一米半低し本部落に於ては第二回津浪襲來前警鐘を亂打し既に避難したるを以て人畜に些少の被害を見ず。（區長木村吉三郎氏郵便取扱局長松尾石藏氏及同夫人談）

尙當地古老吉村サキ氏（現時八十七歳）の談に依れば安政三年舊七月二十三日正午頃歩行困難なる大地震あり其れより一時本町に於ける被害は左の如し。

間後沖より白色を呈したる津波ありたるも今回のものより遙かに弱勢なりし由なり之の津浪後正に四十年後の明治廿九年舊五

人		世帯		家屋（棟數）		損害見積額
死	傷	計	牛潰	流失	床下浸水	計
一	六	七	一	三	三〇	三四
				住家	一	三〇
				非住家	八	三四
						八
						五〇〇〇圓

船		船		其		他	
破損	流失	失	同上損害	船具損害	魚粕損害	橋梁其他の損害	損害
八四	一〇	一〇六五〇圓	〇	〇	〇	四〇〇〇	一四六五〇圓

月節句に大津浪あり夫より三十八年目の本年三月節句に津浪あり約四十年の週期を持ちて來襲するものゝ如し。

三澤村

五川目。（梅津安五郎氏談）午前二時半頃可成強き地震あり家内一同起き出し屋外に避難せるも五六分にして静まりたれば一同再び就寝し揺れ返しのことならん等思ひ津浪襲來は思は

ず居たりしが地震後十分か二十分たしかと思はるゝ頃地響のする大砲の如き音ありて其餘音可成續きて間もなく光りのチラツと窓に映りたるを見それより一時間もたゞざる内に前隣の宮古徳松氏宅より津浪だ津浪だと言ふ騒ぎたてる聲に飛出し海の方を凝視せしにはや近く迄押寄せ居る「チャ／＼」と言ふ非常に騒しき波の音を聞きたるのみにて潮の高さ等判然せず、宮

古氏宅に津浪の達したるは最高潮の時なるべく床下四寸位の浸水あり其時宮古氏椽側前に汀にありし漁船(長さ六間)一隻押流され来り又鷹架石太郎宅より海の方即ち東方六十間程の所にある宮津氏所有の網小屋(間口四間奥行五間)は陸の方へ五間位押流され宮古氏宅前を流るゝ小川に押寄せたる津浪は里道に架しある橋迄(汀より約五丁)襲来せりとのことにて當時汀近く迄二尺餘りの積雪ありこの爲餘程難を避け得たりと話し居れり。

鷹架石太郎氏(六十七歳)の談に依れば餘りに地震に強く少時起床したるも寒氣厳しきため地震の止む共に就寝せしに二三分後大砲の如き音響を聞き稻妻と思はるゝ光を見たるも津浪の襲来する等は氣付かさざりしが「ジャ〜」と言ふ波の音に初めて津浪ならむと思ひ飛び出したる時は既に潮は家の前迄押寄せたるも屋内には浸水せざる程度にて其後は弱き潮のみにて家屋に達するに至らずして止みたり。

明治廿九年の地震は今回の地震に比して弱かりしも海嘯は今回と同程度ならんとのことなり。

五川目被害。小屋大破(一)漁船大破(三)漁船小破(三)損害見積価格五二〇圓

明治廿九年に於ける被害。住家流失(一八)小屋流失(八)住家大破(二)死亡男(六)死亡女(一〇)重軽傷者男(二)重軽傷者女(一)

淋代。地震止みて間もなく雷の如き音ありて三十分の後急に「ジャ〜」と言ふ浪の音不思議に高まりたれば家を出て海岸の方を見たるに黒色の雲を上部に載せたる如き津浪の襲来するを見たりとのことにて浪の最も大なりしは四回目に襲来せし浪にて高さ一丈以上ありしと言へり。此の部落に於ける浸水家屋は二軒にして高橋由藏氏の家は床下三寸餘浸水せり、今回の津浪は汀より、百五十間内外なるも明治廿九年の際には里道を越し道の側迄漁船の打上げられし由にて今回の被害少かりしは當時より家屋の西方高き所に移轉せるためとのことなり。

被害。住家小破(一)漁船大破(七)漁船小破(二)損害見積価格八八〇圓

明治廿九年に於ける被害。住家流失(二)小屋流失(五)住家大破(一〇)

細谷。(中村哲三氏母堂五十九歳の談)三月三日午前二時二十分頃地震ありて家屋の震動大なりしも五分間位にて止みたりこの部落にて地震來ると共に屋外に飛び出して避難せしは五六軒

位にて地震後三十分たちしかと思はるゝ頃ゴウ〜と言ふ地響して唸る音を聞きしも其の儘眠りに就き朝に至りては海嘯を知れりとのことにて漁船四隻の破損ありしのみにて他に被害なく明治廿九年六月の津浪は今回の海嘯に比して弱く中村熊吉氏宅は明治二十九年の位置に其儘あるも前回の海嘯は同氏屋敷迄に達せざりしも今回屋敷間際迄押来りしとのことなり。明治廿九年當時は本部落は大平海邊近くにありしも風の運び来る砂の爲家屋次第に埋れて岡の方へ移轉せりと言ひ居れり。津浪の襲来せるは百八十間乃至三十間位迄なり。被害。漁船大破(四)

明治廿九年に於ける被害。住家大破(二)住家小破(一)

六川目。三月三日午前二時二十分頃起りし地震は近年になく強く屋外に避難せんと考へて居る内に次第に弱くなりたるも再び揺り返し来るべしと思ひ下駄等を揃へ何時にても飛び出し得る様用意せり前回の経験より津浪のことも思ひ出し息子の妻に南方家の側を流るゝ小川を見て来る様命じたるに何等異常なしとのことにて就床せしに半時もたたざるうち「ジャ〜」と言ふ波の音を聞き直に津浪の襲来を直感し寢床の中に津浪だと大聲に叫び避難せんとせし時は既に津浪は住家に浸水し来り息子の妻直先に戸押開かんとせしも津浪にて押寄せられたるスガ(水)

等の爲に開き得ず窓も積雪の爲開き得ず狼狽するうち次に来る津浪の爲横の戸獨りにはづれたるを幸一同避難するを得たりとのことにて其時の浸水は二尺乃至三尺なりしも三日目か四回目襲来せるもの最も強く高さ一丈五尺以上にて山の如くなりて襲ひ来れり、避難の際はスガ木片等のため足を所々疵つけられしとのことにて熊野氏も矢張大砲の如き音を聞き光を見たる由なり。尙親族にあたる熊野氏住家より南方二丁近くの所にある熊野留次郎氏住家も津浪の襲来を受け浸水四尺以上に達し家中スガを打込まれ漸く避難するを得たりとのことなり。襲来せる津浪は汀より二百二十間乃至百七十間位なり。

被害。浸水家屋(二)漁船大破(五)漁船小破(二)損害見積価格。七五〇圓。

明治廿九年に於ける被害。住家流失(三)住家大破(一)住家小破(二)。

織笠。地震と共に家屋の動揺烈しく屋外に避難し地震静まりて家に入りしに「ドン」と言ふ雷の如く又地の底からも響いて来る如き音響の聞えて一時間以上を經ちしかと思はるゝ頃「ジャ〜」と言ふ波の音が聞えて来ると同時に人聲の騒がしく裏戸を開けて見て津浪と言ふ聲を聞いて初めて津浪の襲来せるを知り

し由にて其時は既に大浪襲來せる後にて稍と津浪の襲來せるは汀線より百七十間位なり。

被害。漁船大破(五)損害見積價格 七九〇圓。

明治廿九年に於ける被害。住家流失(二二)小屋流失(六)住家大破(一三)小屋大破(一)住家小破(五)浸水家屋(五)死亡男(一五)死亡女(八)重輕傷者(三)

鹽釜。近年になき強き地震にて屋外に飛び出したるも五六分にして止みたれば再び就寝するや大砲の如き音ありたり、子供地震後尙床に就かず屋外に出しなどして居りしに地震後三四十分後と思はるゝ頃子供津浪だと言ふを聞き提灯を持ちて海邊の方へ出掛けたるに西館要助氏横の道に泥の押寄せられて道を塞ぎ居り危険と思はれたれば其儘歸り岡より見れば潮は良く判明せざるも凄じく浪の音聞えたり、當部落にて浸水せる家は川村末松氏澤藤市太郎氏田中由太郎氏宅にて船小屋四軒破損せられたり西館要助氏宅より汀迄は凡そ二百間なり、田中由太郎氏宅にては何回目に襲來せる津浪なるが不明なるも忽ち浸水し逃げ惑つて居る處へ再び襲來せる津浪が座敷側に漁船を打着け來り其の船を渡りて家内一同避難するを得たりとのことなり。

被害。小屋大破(四)住家小破(三)浸水家屋(一)漁船大破(二)

漁船小破(一)。

損害見積價格、一一七〇圓

明治廿九年に於ける被害。住家流失(四六)小屋流失(一九)住家大破(二〇)小屋大破(一)住家小破(一)死亡男(二二)死亡女(一一)重輕傷者(二二)。

砂森。地震の強きに驚きたるを五分位にて止み然して止みたる直後一回雷の如き音と光あり其より三十分位にして海嘯の襲來あり、父より津浪と言ふものは夜は無きものと聞かされ居りし故今回の地震が津浪を伴ふ等は考へられず。打寄する浪の音によりて津浪を知れり。潮の高さは判明せざるも眞黒となりて盛上り波の前に砂をまくり立て、來れりとのことにて最も大なる浪は汀より四丁位押寄せたり明治廿九年の津浪に比し同じ程度ならんとのことにて僅少なるも五住家に浸水し、船小屋一軒破損せりこの海岸には明治廿九年迄は汀近く迄草茂れるも海嘯後枯死せりとのことなり(立花徳次郎氏五十三歳談)。被害。漁船大破(一)被害見積價格。一二〇圓。明治廿九年に於ける被害住家流失(一八)小屋流失(三)死亡男(一二)死亡女(一〇)重輕傷者(八)。

天ヶ森。地震は比較的緩かに思はれたるも非常に大きく揺れ

人々は大部分屋外に飛出したり。地震止むや間もなくドーンと言ふ大砲の如き音を聞きたるも其儘就寝して翌朝津浪のありしを知れり。部落の人のうちには津浪を見たる者あり其の話に依れば地震後一時間余過ぎたる頃家の近くに浪の音起りたるに驚き起出して見しに屋敷近く迄浸水し來れるも一時間は浪の音は變らざるも津浪は次第に弱くなれりと言ひ居れりとのことなり。

襲來せる津浪は汀より二百三四十間迄なり。

被害。小屋大破、(一)

明治二十九年に於ける被害。住家流失(一)住家大破(一)

六ヶ所村

尾駸、村長高村氏談に依れば此の地方としては近年になく強く感じたる地震にて屋外に飛び出し、人も可成り地震止みて十五分位後大砲の如き音響を一回聞きたり。村人の内には稻妻を見たりと言ふ人もあれども氣付かざりき。地震後一時間位たちしかと思はるゝ頃より波の音稍と暫く異常に聞え翌朝になり津浪の襲來せるを知れり。海岸にはスガ(水塊)の打上げられたる處所々にあり、津浪の打寄せたるは海邊より、百二三十間位迄にして當部落としては被害なかりしも泊は當村に於ける最も被害多き所なりしとのことなり。

尾駸、被害なし。

泊、負傷者一名(幸徳丸乗組員の重傷)

船船の大破一(大蛇に碇泊中の幸徳丸)

船船の小破四。

新納屋。強き地震あり寢床より起き出したるも間もなく地震止みたれば再び就床せしに二十分位過ぎたる頃大砲の如き音響を聞きたり。翌朝海岸を見て昨夜津浪ありたるを知りたる由にて此の部落にては屋外に出て地震を避けんとせし者少きこととなり。新納屋は丘陵にありて急坂をなして海岸に連り船小屋ノ粕製造小屋等は汀より百間内外の所にあり津浪は此處迄打寄せ來り小屋に浸水せしモノ粕を濡せしのみにて他に被害なかりき。

平沼ヶ濱。(橋本岩太郎氏談)地震に驚き跳起きたるも六分位にて地震も止みたれば其儘床に就きしに雷鳴續けさまに二回程あり電光らしきものを見たる由にて翌朝迄海嘯のありしを知らずスガ(水塊)の沿岸に一間以上も所々に高く打上げられ三四十間潮の陸に押寄せたる跡を見て初めて津浪のありたるに氣付きたり。小川原沼へは河口より五丁位津浪押寄せたる如く沿岸には大なる水塊至る所に打上げられ所に依りては水塊は相重なり

て六尺余りに達し居れり平沼ヶ濱は被害皆無なりき。

平沼。二時二十分頃地震ありて戸障子鳴動し家屋激しく動揺し不安を感じたれば屋外に飛び出し地震の止むを待ちて家に入り床に就きしに十五分もたちしかと思はるゝ頃「ドン／＼」と物を打つ時の如き音を聞き三十分位にして海の方角に「ジャジャ」と騒しき音を稍々久しく耳にせり。津浪による波の音とも知らず居りしとのことなり。

被害なし。

津輕海峽に臨む下北沿岸中、田名部町關根、川代、烏澤は被害全く無く津浪に關し注意され居らず。大畑、風間浦兩村の部落は午前三時半頃津浪の來襲あり、夜明けと共に視野廣くなりて午前五時半頃より午前六時過ぎ迄數回著しき退潮ありて津浪あり。之等は北海道及海峽對岸相互に反射せられたるものと想像さる。然して平館海峽に臨む大奥村の内大間奥戸並に佐井村は夜明後の津浪のみを知り午前三時半頃のもの認めたる者殆どなかりき。奥戸及佐井村は波高〇・六米大奥村大間以東は〇・九米乃至一・二米の津浪ありたるものゝ如し。廿九年の津浪より一般に弱きものと稱せられ殊に此地方に於ける各漁村は汀線に接し高さ一米五以上の柵に石塊を充填し以て使用地域となせる

所多く或は又汀線より十五米乃至十八米高さ一米乃至十八米高さ一米乃至一米五の砂丘又は傾斜地に漁舟を引揚げ置く地方なるが著しき被害なかりし程度に過ぎず。

田名部町

關根、川代、烏澤各部落は被害なく汀線より二十米高さ一米位の砂丘にありし小舟も流失するに至らず關根にては津浪の浪高一米と稱せられ井戸川は雪面の波痕により按ずるに一米六に達したるもの如し。

大畑村

正津川。川口一米増水あり爲めに漁舟押流さる。小舟大破二、小破五、計七隻。損害見積高一七三圓。

大畑。午前三時半頃海鳴ありたる後津浪來襲、大畑川河口を北々東に向へるが増水一米四あり。碇泊中の發動機船相互衝突の爲小破す。午前六時頃水急激に引き去りて凡そ五分後前回より稍々高き浪襲來す、尙當日は午後六時迄平常と異なる波の去來あるを認めたり、尙古老の談によれば廿九年の津浪には川筋二米四の増水ありたる由今次の津浪は弱きものと信ぜらる。發動機船小破二隻。損害見積二〇〇圓。

湊。地震後十五分頃轟々海鳴あり、北々東の方角より津浪襲

來汀線より廿五米高さ一米五内外の砂丘上に押寄たる有様より想像するに波高一米ならんと言へり。小舟大破四隻。損害見積高五二圓。

上野。小舟大破二隻。損害見積高四〇圓。

二枚橋。午前三時半頃東方に遠く大砲の音に似たる長く餘韻を引ける海鳴を聞きたる後津浪の來襲あり、波高一米程度にて舟の南方に流れ寄りし、點を考ふるに津浪の方向は北方より來りしものと思はる。尙五時半頃より。六時半迄四回著しき引き潮ありて其都度津浪ありたる廿九年の津浪の際は川底の石塊瓦落々々と流るゝ音を聞きたる程激しく川に逆流せるが、今回はさることなきにより弱きものと言ふ。小舟大破五隻。損害見積高一〇九圓。

木野部。午前三時半頃津浪ありて小舟流れ出し水嵩一米八に及ぶ。磯岩に積る雪の消え残れる程度により波高一米五ありたる如し、尙午前四時半頃より、同六時頃迄陰曆節句の大潮程度に退潮ありて數回の津浪を認めたり。古老の談に廿九年の海嘯には小舟一隻大破、一隻流失に比するに今次の津浪は強しと言へり。小舟大破八、小破八、計十六隻、損害見積高四六五圓。赤川。小舟小破一隻。損害見積高一六圓。

風間浦村

下風呂。(戸數二八〇戸 一、四〇〇人)地震の爲部落民起出で警戒中津浪襲來し小舟流失せるを總出にて收容に努めたるが海岸の柵に残る波痕を計るに一米八に及びたりと。古老の談に廿九年の津浪より弱しと言ふ。小舟大破四、小破二計六隻。損害見積高二七〇圓。

易國間。退潮を認めたるものありたる由なり。小舟大破一、小破一計二隻。損害見積高四五圓。

蛇浦。地震の爲部落民津浪を警戒せるが午前四時頃襲來部落中央の川に架したる橋附近は縣道々路面に海水溢れたり。道路は高さ一米二位にて汀線より十米の距離に過ぎず。六時頃退潮ありて再び襲來せるも波高は低く〇・六米程度なり。小舟大破一小破一計二隻。損害見積高四五圓。

大奥村

下手。小舟小破十隻。損害見積高五八圓。
大間。午前五時半頃夜明けと共に陰曆節句の大潮以上に海水引き去りて後津浪あり。方向は北々東にて漸次水嵩を増し浪高凡そ一米三に達せり。大間川は逆流の爲十二糎以上の氷裂け橋脚に小舟衝突せるも被害なく流出せる小舟は全部收容せられ唯

かへり波の爲に發動機船一隻。岩礁に衝突破損せるのみなり發動機船小破一隻、損害見積高七五圓。廿九年の津浪には退潮區域大にして生魚ビチ／＼躍るを捉へんとする者あるを止めし程なりと言ひ被害は無かりしも今次の津浪に比し大なりしと。奥戸。午前五時半頃浪潮を認め浪高〇・六米位の津浪ありたるも被害なし。

佐井村

佐井。〇・六米程度の津浪ありたり。被害皆無。

昭和八年三月三日三陸沖強震並に津浪の北海道襟裳岬附近に於ける情況

浦河測候所長 北田道男

く動搖し、安置せる器物移動し、机上の物體顛落す。柱時計止り、液體溢出す。地鳴を聞かず。

地震直後、不取敢、中央氣象臺並に北海道廳宛、強震ありたる旨の略電を發した處、中央氣象臺より震央並に各地の震度を報じた電信を接受した。

緒、地震の振幅が大きかつたが加速度が割合に緩かつた爲、輕微な被害で済み、又顯著な餘震も伴はず、一般の人々が安心して一先づ寢靜つた、三時半頃、幌泉郡笛舞村(浦河から海岸傳ひに東南東へ約三十四軒距てた地點)から測候所へ電話がかかり、潮流異常にして、磯舟が岸に横向きとなり、左右に動搖しつつある旨通報があつた。是、測候所に入りし津浪の第一報である。

直に警察へ通知すると共に、小職並に所員堺技手は海岸に至り海面の昇降を注視した。海水は暫く異常がなかつたが、間も

一、緒言

昭和八年三月三日午前二時三十二分頃、浦河測候所並に其附近に於て、性質稍緩やかなるも震幅の極めて大なる地震を約三分間の長きに亘つて感じた。熟睡中の人々皆眼を覺まし、避難の準備をなし、中には夜着の儘氷點下十度の戸外へ飛び出した者もあつた。

測候所の地震計(中央氣象臺型簡單微動計)の記録に従へば

發震時 午前二時三十一分四五、二秒。

初動 北へ五、三ミクロン 西へ一、三ミクロン。

總震動時間 約一時間三十分。

人身感覺時間 約三分間。

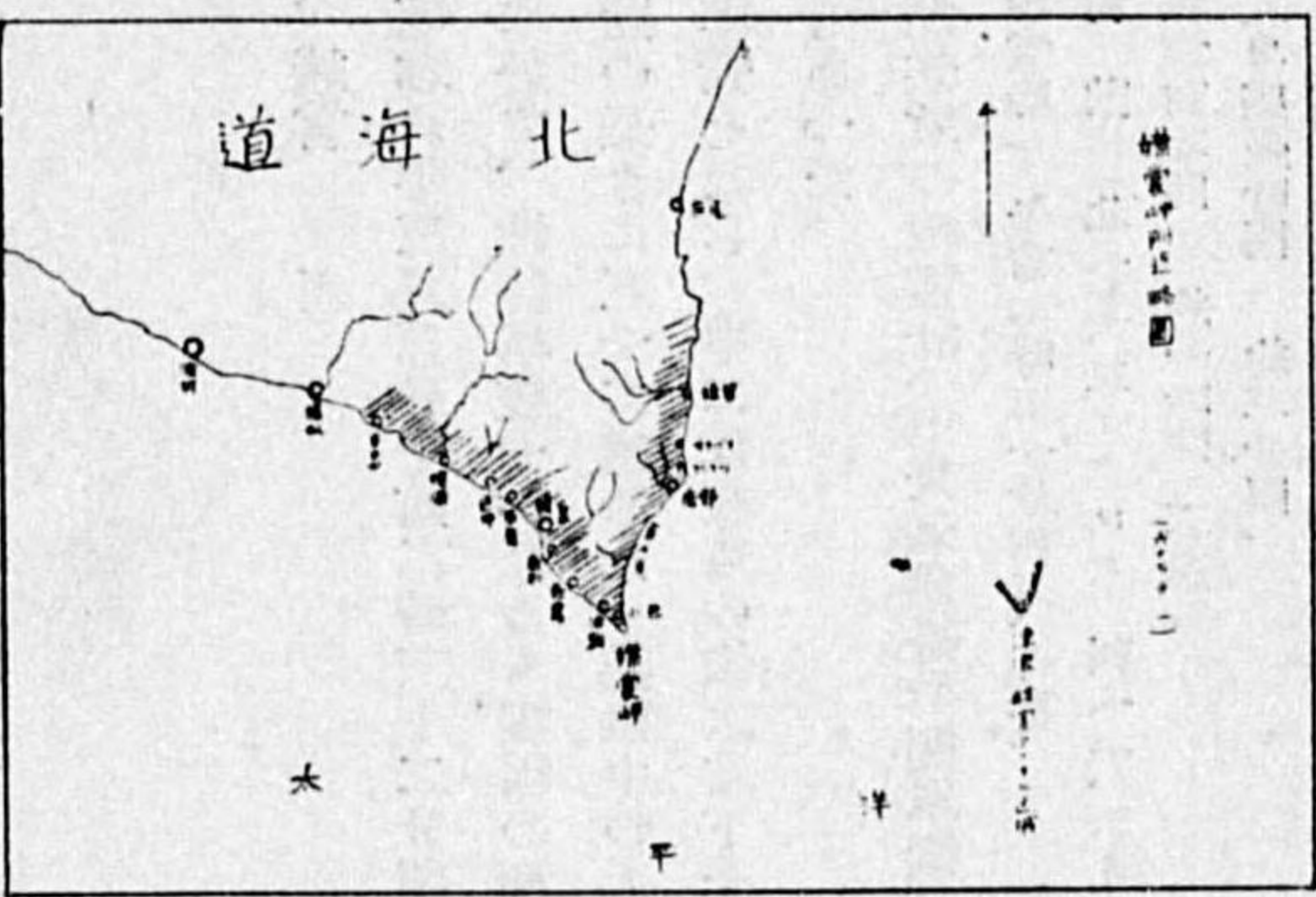
性質 緩。(極めて緩ならず)

震度 強震(弱き方)。

記事 發震後二〇秒にして、震動の振幅は地震計の可測の範圍を越えたるを以て、初期微動繼續時間最大動等は驗測し得ず。家屋激し

なく、小波が岸に押し寄せ一波毎に海面が昇り、忽ちにして八尺餘増水した。(この時及び其後の状況の詳細は後記す)

其後、次第に判明する處に依れば、襟裳岬附近、特に其東側に於て、被害甚だしく、死者十三名、流失家屋二十八棟、其他多くの損害があつた由である。



小職は、取敢ず襟裳岬附近に出張し、實地踏査に赴いた。

二、襟裳岬附近の地勢
襟裳岬は、略菱形をなす北海道本島の南の頂角に當り、

の河川も流れてゐない。要するに、三陸附近のリ阿斯式海岸とは著しく地勢を異にしてゐる。然し、海岸線自身が非リ阿斯式であつても、襟裳岬のやうに大規模な、而も著しく鋭角的な岬の兩側の海岸は、云はば「海洋にV状に開いた灣」の片側に當る譯であるから、津浪が來襲すれば、岬の兩側にエネルギーが蓄積して異状に増水する事が考へられる。今回の地震の震央は襟裳岬から南々東の方向に當つてゐるから、岬の東側に、浪がより高まる事も考へられる。

三、地震の情況

震央が稍遠かつた爲か(浦河より三四〇軒 襟裳岬附近の各地に於ける地震の模様は、浦河と大差はなかつた。即ち性質緩かなるも震幅の大なる地震を三分乃至四分間感じ、何れも眼を覺した。震度は強度の弱或は弱震と推定される。地震後地鳴を聞いたと云ふ者もあるが、恐らくは津浪に依る海鳴の事ならんと思はれる。地震に依る被害は殆んどなかつたやうである。

四、津浪の情況

津浪の最初に來た時刻は、目撃者も少く、又目撃した者も恐怖の爲、時計を見る餘裕が無かつた爲、正確に知り得ない、併し、小越(圖参照、以下同じ)築港事務所の中島技手は、地震

後海岸に出で、親しく津浪を目撃した。氏に依れば、初に潮退き、海面は平均干潮面より約三米六〇低下し、間もなく上昇し始め、三時十分頃最初の高極に達す。其後約三十分の週期を以て來襲し、三回目(四時頃)最も高く、海岸に打ち上りたる高さは約七米二四に達す。四回目より週期早くなると共に浪高も次第に低くなりたり、と。

従つて、海面の最初の低下は地震後約三十分、上昇は四十分後と見るべきであらう。他の人達の語る處も略一致する。

津浪の高さは、中島技手の談の如く、各地共三回目のものが最も著しかつた由である。數量的に觀測したのは、同氏の外に類似築港事務所の吉田技手がある。吉田氏は、地震後、津浪來襲の報知を得て、海岸に出で、棧橋の桁を目標にして海面の昇降を注視した處、最初潮の退いた時は、平均干潮面より約二米低下し、(この最初の低下は、實見者の語る處より推算したる由)一回目の最高は二米七〇、(地震後四十分)其後約二十五分を週期として上下し、三回目最も高く、三米六〇に達した。砂濱に沿つて浪の打ち上つた高さは、約五米二〇に及んださうである。

小職が各地に於て、人の語る處に依り、或は岩の濡れ跡、或

は積雪の溶けた下際等を使い、自己の身長を基準として目測した津浪の最高の高さ(平均海面より)は左の如くである。

鹿野村	約 八〇米	鹿野村	約 一〇〇米
小越村	約 七〇米	油駒村	約 八〇米
歌露村	約 五〇米	歌別村	約 六〇米
歌別村	約 四・五米	幌泉村	約 四・五米
冬島村	約 三・五米	冬島村	約 二・四米
様似村	約 四〇米	浦河町	約 二・七米
猿留村	約 九〇米		

以上の如く、各地共相當に高く、殊に鹿野村に於て著しく十

四米二に達してゐて、三陸地方に比して浪高に於ては決して劣らない。併し其割合に被害の少なかつたのは、襟裳岬附近は、第一に海岸平野の狭小な事、第二に交通の不便な事に依つて人家が稠密でない事に依るものであらう。

最高起時

四時	頃	高	二・七米(推測)
四時四十三分		高	二・四米

五時十分
五時二十五分

一・五米
二・〇米

其後次第に週期早くなり、昇降の程度も減少し、數量的の觀測は不可能となつた。併し當日午前中は、目測に依つても潮流の異狀を瞭然と認められた。

海鳴は、各地共等しく聞いた、その音の形容は例外なく、風が急に吹き出した時のやうであつたさうである。測候所に於ても聞き得た、餘り著しくはなかつたが、閉じた室内に於ても聞えた程度である。

五、津浪の被害

今回の津浪に依る北海道の被害は左の如くである。

猿留村

倒壊家屋	非住宅	三棟	被害額	九〇〇圓
半壊家屋	住宅	二棟		一、〇〇〇圓
流失家屋	非住宅	四棟		一、三〇〇圓
持符船	流失	一五隻		二、一〇〇圓
家具什器類				六四〇圓
水産製造物				六一〇圓
計				六、九五〇圓

庶野村

死者 一〇名 内男五 女五(男二は三月四日死亡)

二四二

負傷者 五〇名 内男二〇 女三〇

倒壊家屋	住宅	一八棟	被害額	六、三〇〇圓
半壊家屋	非住宅	六棟		二、〇〇〇圓
浸水家屋	住宅	二六棟		五、三五〇圓
流失家屋	非住宅	二一棟		三、六九〇圓
持符船	流失	九三隻		三、二一〇圓
發動機船	流失	七棟		一、五四〇圓
持符船	流失	一八棟		一〇、二〇〇圓
持符船	流失	七棟		六、八二〇圓
持符船	流失	九八隻		八、九八〇圓
持符船	流失	一二隻		一、〇二〇圓
持符船	流失	二隻		三、〇〇〇圓
持符船	流失	五隻		一、九〇〇圓
持符船	流失	五隻		二、七五〇圓
持符船	流失	一五隻		二、〇〇〇圓
持符船	流失	一五隻		二、七八〇圓
持符船	流失	一五隻		三、六一〇圓
持符船	流失	一五隻		八、六八〇圓
持符船	流失	一五隻		四、二四一圓
持符船	流失	一五隻		一、二〇〇圓
持符船	流失	一五隻		一〇、〇八〇圓
持符船	流失	一五隻		一八七、五三七圓

小越村

死者	三名 男二 女一	被害額	二〇〇圓
負傷者	六名 男四 女二		一、二〇〇圓
馬溺死	一頭		二、四〇〇圓
倒壊家屋	非住宅	二棟	二、四〇〇圓
半壊家屋	住宅	三棟	二、四〇〇圓
流失家屋	住宅	八棟	六〇〇圓
持符船	流失	二棟	一五〇圓
持符船	流失	二棟	四〇〇圓
持符船	流失	二棟	六〇〇圓
持符船	流失	二棟	三、六〇〇圓
持符船	流失	二棟	二、三〇〇圓
持符船	流失	二棟	二、三〇〇圓
持符船	流失	二隻	三〇〇圓
持符船	流失	二隻	一〇〇圓
持符船	流失	一隻	一、九〇〇圓
持符船	流失	一隻	七四六圓
持符船	流失	一隻	四、七八〇圓
持符船	流失	一隻	二二〇圓
持符船	流失	一隻	二二、〇九六圓
持符船	流失	五棟	二五〇圓
持符船	流失	六隻	四〇〇圓
持符船	流失	一五隻	四〇〇圓

歌露村

其他の漁船	流失	一隻	被害額	二五〇圓
水産製造物				二六〇圓
漁具類				二四〇圓
其他の被害				五〇圓
計				一、八五〇圓

歌別村

其他の漁船	流失	二隻	被害額	二一〇圓
水産製造物				六五圓
漁具類				一六五圓
其他の被害				六〇圓
計				五〇〇圓

幌泉村

其他の被害			被害額	三〇〇圓
水産製造物				三五〇圓
漁具類				五〇圓
其他の被害				二、四五〇圓
計				三、五五〇圓

二四三

持符船	破損一三隻	被害額	六〇五圓
發動機船	流失一隻	被害額	一、一〇〇圓
其他の漁船	破損四隻	被害額	七七一圓
水産製造物	破損五隻	被害額	六五〇圓
漁貝類	被害	被害額	一、一六三圓
其他の被害	被害	被害額	二五〇圓
計		被害額	一八九圓
笛舞村		被害額	四、七五三圓
漁船流失	一隻	被害額	二〇圓
水産製造物	被害	被害額	五四二圓
漁貝類	被害	被害額	三〇圓
其他の被害	被害	被害額	九二圓
計		被害額	六八四圓
近呼村		被害額	三二〇圓
漁船破損	四隻	被害額	一九〇圓
水産製造	被害	被害額	五一〇圓
計		被害額	二二五圓
類似村(類似郡一四)		被害額	
浸水家屋	住宅一棟	被害額	
	非住宅九棟	被害額	
發動機船	流失四隻	被害額	

二四四

漁船	流失一五隻	被害額	一、三六〇圓
水産製造物	破損三一隻	被害額	一、五八〇圓
漁貝類、水産製造貝類	被害	被害額	四、〇七四圓
其他の被害	被害	被害額	一、二八五圓
幌満橋破損	被害	被害額	六〇〇圓
計		被害額	九、一二〇圓
總被害額		被害額	二十三萬七千五百五十圓

この他海藻類の被害約 四五、〇一八圓と見積らる。

以上の如く、庶野村に於て被害最も甚だしく、死者十名、負傷者五〇名、家屋流失二五棟を出し、總被害額は十八萬七千餘圓に達してゐる。

六、雜報

(イ) 浦河町木谷氏所有の發動機船は、當時幌満の沖合を進行中であつたが襟裳燈臺が突然眼界から去つたのが奇異に思はれた外地震並に津浪は全然知らず、翌朝襟裳岬沖に至り、流失渡船を認め奇異な感じがしたさうである。

(ロ) 六日頃、庶野村から約二十五湊沖合に流失家屋、漁船其他が相集つて浮遊し、恰も小島のやうに見えたさうである。

(ハ) 浦河町立實踐女學校教諭奥山氏は地震中、北西方の山頂附近に星光に似た光の發するのを認めたさうである。

雜報

茨城縣下に於ける津浪の調査 水戸測候所

一、本縣土木課にて行はるゝ那珂川河口に近き祝町下の川岸に於ける自記檢潮儀記象に依る。

三日三時八分頃〇米二程減水したる後〇米三六の浪一回あり四時五分より五時十分の間に著しきもの三回あり、六時頃より再び著しくなり七時三十五分に最高〇米七五を現はし以後十時五十分より漸次弱まりたりしが二十時前後約三時間に互り稍著しきものありたり。

著しきもの十回の平均	高さ〇米四二
	週期十六分五
最高	時刻七時三十五分
	高さ〇米七五
	週期十分〇

二、同上稍上流なる字小川にあるものに依る(時間は正しからざるものゝ如し)。

三日三時四十分より水位稍上昇したる後〇米一八程減水し四

時十分〇米三の浪一回あり其後五時前後に互り著しきもの三回あり、又六時より十時迄著しきもの十三回あり漸次弱まりたりしが再び十九時より二十一時三十分迄稍著し。

著しき浪十六回の平均	高さ〇米二四
	週期十四分〇
最高	時刻七時五十七分
	高さ〇米三四
	週期十二分

三、多賀郡大津町役場よりの報告 地震及津浪の被害なし。

四、多賀郡平潟町役場よりの報告 地震の被害なし、津浪と稱する程度のものに非ざるも午前六時三十分迄六尺強引きて後大潮となる被害なし。

尙本縣沿岸には被害なきものゝ如し。

發光現象報告

筑波山測候所

三月三日二時三十二分の地震に見たる光。	
一、見た場所	筑波町大字筑波東山
見た人	石井富次郎(筑波山測候所小使)
見た時	震動中(最大動直後)
見た方向	東南東と思ふ
光の形	不明(パツパツと光り、電光より速い)
光の色	不明

二四五

光つた回数 二回

備考 此の人は地震に驚いて直ちに起きて居たが、其内グラ／＼と大きく来たので驚いて表へ飛び出したが其の瞬間に前記の光りを見た、形や色は明瞭に見る間がなかつた方向は戸口の位置や駆け出して立ち止つたと云ふ場所から考へても東南東であると思ふ。

二、見た場所

筑波町ケーブルカー宮脇停車場

見た人

小池武男(宮脇驛助役)

見た時

震動中

見た方向

南(東京方面)

光の形

電光の様に明瞭ではない、そこに雲があつたらしく、其の後ろでパツパツと三回光つた。

光の色

淡青色

光つた回数

三回

備考 地震に驚いて直ちに表へ飛び出したが、関東大震災の事を思

ひ出し、先づ東京方面を見た東京の電燈の光りは平常の如く見へ

て居た、其の時層積雲の後ろで前記の様に光つたのだと思ふ。(高

山四郎)

神奈川縣下地震被害報告

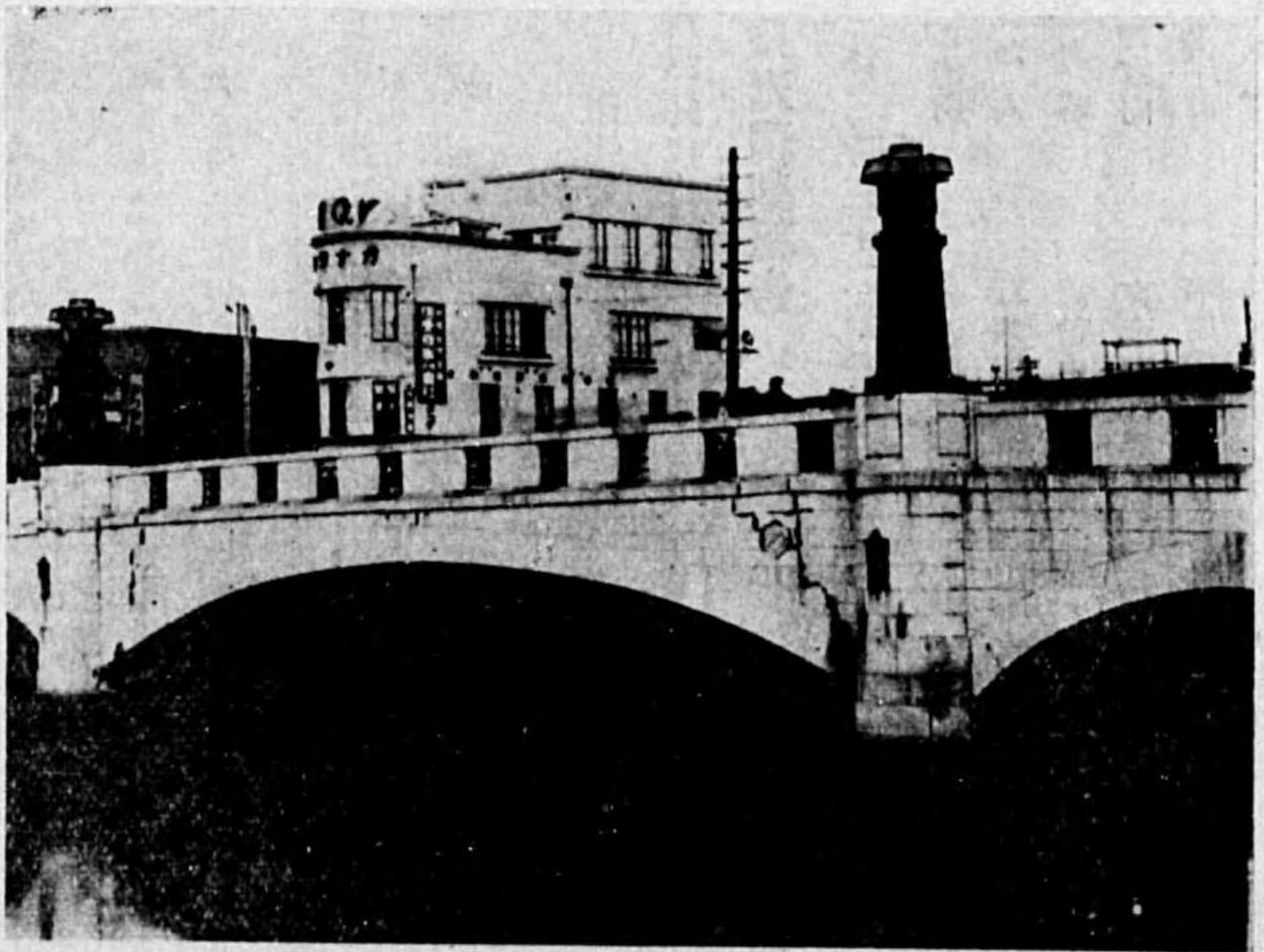
神奈川縣測候所

昭和八年三月三日の三陸沖強震により横濱市中區大岡川に架せる吉田橋(伊勢佐木町と尾上町との連絡橋)橋脚及橋欄は添附せる寫眞A Bの如き損傷を受けたり。

Bは橋欄の損傷最大なる箇所(C圖b)の寫眞にて石柱の前方にのめり出でたり。全體としての同橋損傷の程度はC圖の如

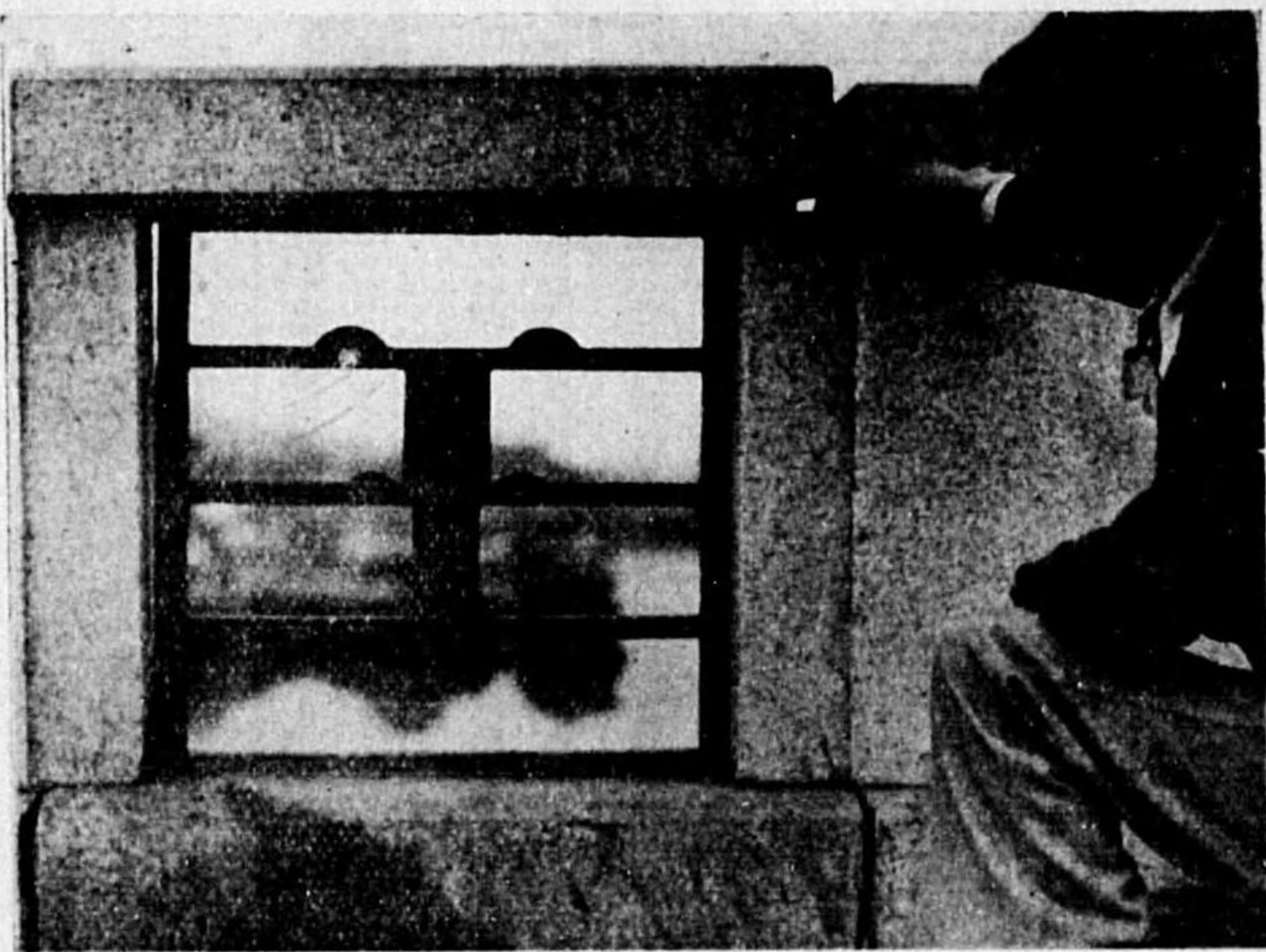
し即ち大體として同橋は北二十度東の方向に震害を被り、其の方向は大略震源に向ふ同橋は「かねの橋」とも呼ばれ明治二十一年十一月竣工せる本邦最初の鐵橋にて大正十二年の大震災にて大

(む 望りよ 西北) 害被の脚々橋田吉(A)



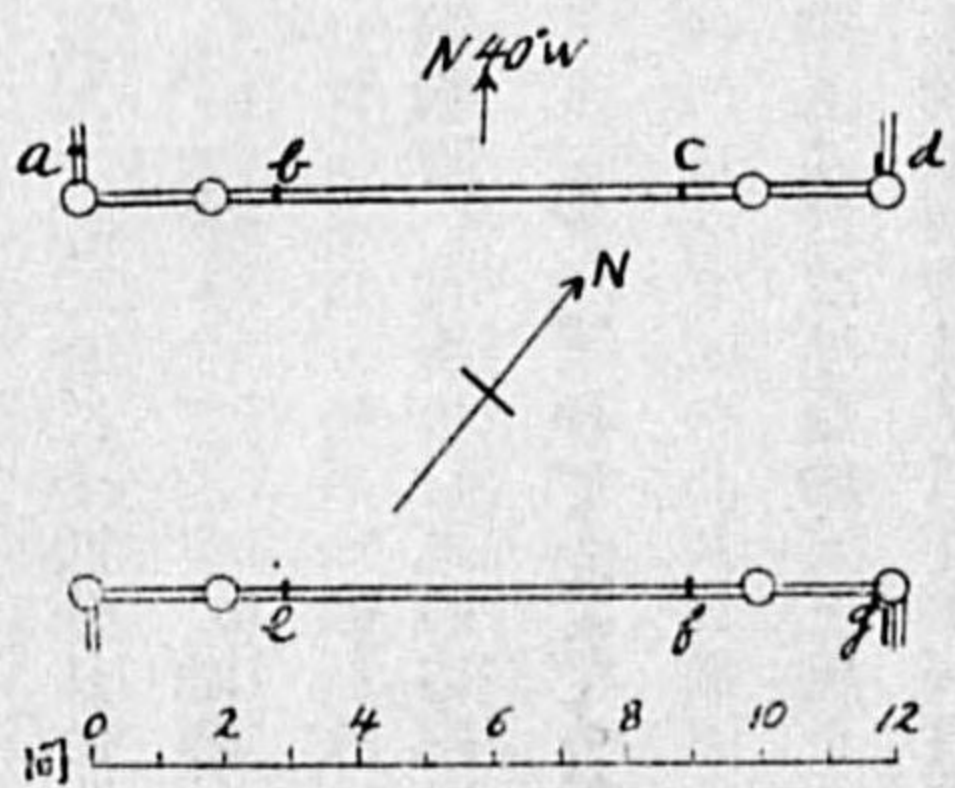
破せしを修繕を加へたるものなり。

因に本所にての最大振幅は三四耗五なり。附近の諸橋梁は檢せしに、羽衣、豊國、蓬萊港の四橋は阿元に小損を被りたり。



るめのへ前欄の側西北害被の欄々橋田吉(B)

圖取見所箇損破橋田吉(C)



- a、笠石少し開口す
- b、笠石の開口三・五釐一・五釐下る
- c、笠石の開口一・五釐〇・一釐のめ
- d、護岸上の基礎石少し動く
- e、笠石の開口二・五釐〇・二釐のめ
- f、笠石の開口二・三釐〇・一釐下る
- g、橋脚の飾石南東の方に少しずれる

水るあに所のりよ町生相道車馬 (E) 噴は點の示指りせ水溢し裂破管設埋道 下右眞寫りあに元根の燈街にて所箇水 りは様有る居れ流の水溢は斑白の

三十一分より同三十六分（日本中央標準時）に至る約五分間左の地點に於て激甚なる海震を感じせり。

位置 北緯四十一度五十分、東經百四十九度三十分

狀況 當初恰も機關全速後退せし時の如き震動をせしが瞬時にして上下動甚しく羅針儀爲めに躍出せざるやと思はしめ就眠中の船内一同寢床を蹴つて室外に飛び出だせし程度なりき。

天候 曇 風向 西 風力 四 氣壓 二九、九四

氣溫 零下三度 水溫 一度

直ちに機關廻轉數、塗水、操舵機を點檢せしも何等異狀を認めず依つて海震と斷じ、海岸局銚子を経て氣象臺に通告せり。

發光現象に關する報告

一、大森區新井宿四丁目二六四窪田瀬吉氏より本臺宛書簡に依れば次の如し。

昨夜の地震に私家族一同戸外に飛出しましたが最大震幅を感ずると同時に北西（寧ろ北より）の空より電光一閃致しました御参考迄御知ら一致します、普通はピカ／＼と瞬きますが昨夜のはピカツと一光りしたのみのやうでした先も先年函根地方大地震（北伊豆烈震）の時は西南方の空にピカ／＼と

致したのを見ました。

二、茨城縣平磯町電氣試驗所平磯出張所中井友三氏より本臺藤原技師宛に寄せられた書簡によれば次の如し。

今回の三陸の地震に於て發光現象を相認め申候間御報告申上候。

一、發光現象發見當時の経緯 地震を感ずると同時に起床暫し様子を伺ひ居り候ひしも繼續時間長くして終息の様子も見えざる故に萬一の場合の逃出しの準備として雨戸（南向き）を一枚開けて暫し外を見て居る内に南方の空に發光を認め候。

一、發光の時刻及光の繼續時間 大體の見當で最初に地震の身體に感じ初めてから約三、四分の時刻。光は始んど瞬間的。

一、方向及高度 南方、暗夜のことゝて對照物無き爲精確のこと不明なれども大體の見當で距離約十米の廣場を隔て、存在する平家の屋根の少し上位の比較的低き空間に發見。

一、形及色 形は一つの線より成る圓弧。色はアークの色に近い様な淡青綠色 恰も虹狀で、唯色が單色であると云ふ點が虹と違ふ、圓弧の半徑は大體の見當で普通の虹の半徑と同等か。線の幅は虹の七色の線全體の幅よりも細い様に感じた線は相當はつきりした線。光度は弱い方。尙當夜は晴天、星

本村字小泊にあり、井戸の深き地上より水面まで約五米、水深二米。

海嘯前三日より井水混濁、海嘯後も少しく混濁を見たり。

(3) 村社、新山神社々務所の井戸

地上よりの深き十一米、

海嘯前四、五日より混濁濁水せり、海嘯後五、六日にして舊に復す。

この井戸は如何に降雨等ありても未だ嘗て混濁を見たることなきものなりと云ふ。

(4) 及川義雄氏宅の井戸

字杉下にあり、地上よりの深き六米。

海嘯後三、四日混濁濁水を見たり。

(5) 熊谷與左衛門氏宅の井戸

字杉下にあり、地上よりの深き四米。

海嘯前三日より混濁濁水し海嘯後二日にして舊に復せり。

(6) 正源寺内の井戸

字仲崎濱にあり、井の深き地上より二米。

降雨もなかりしに二月半ば頃より一週間程混濁したりと云ふ。

以上の井戸は高地にありて今回の海嘯には直接被害なきものなり。

海震に關するウルツプ丸よりの報告

農林省

農林省所管ウルツプ丸よりの無電報告によれば「三日午前二時三十分鮫崎より眞方位三十六度三十哩にして約一分間強き震動を感ぜり」といふ。

光を諸所に認めた。

前述の通りにして此の光が電力線電燈線の切斷等に依り生ずる火花、或はアークに依るものに非ざること光の形よりして容易に想像し得られることにして、又當地は水戸に候へ共其の光を認めた方向には斯かる電力線電燈線は無之候（但し當家より南へ數丁先迄は電燈線有之候）以上は小生の住家（水戸市上市備前町）に於ての記事に候同日平磯の役所に出動しまして此の話を致し申候處平磯でも同時刻頃南方に光を認めたと云ふ者一名有之候但し此の平磯に於ける光はサーチライト狀の光だつたと申候但し此の平磯の方の話は確信を以て御紹介出来不申候。

海嘯前後に於ける井水の變化

岩手縣氣仙郡越喜來村 小原永太郎氏報告

尋常高等小學校長

岩手縣越喜來村に於ける井水の變化

(1) 龍昌寺内の井戸

本村字甫嶺にあり、井戸の深き地上より水面まで約三米、水深一米餘

海嘯前凡そ二十日より濁水、海嘯後舊に復せり。

同寺内に泉水あり、この泉水も同様の變化を見たり。

(2) 平田玉男氏宅の井戸

附 録

明治廿九年六月十五日海嘯概況報告

岩手縣宮古測候所

明治廿九年六月十五日午後八時頃の海嘯は近代未聞の一大津浪にして北は北海道及青森縣の一部より南は福島縣に波及して殆んど數百里に亘れり。

就中被害の首なる地方は本縣沿海一帶及宮城縣北部沿海にして其の殘酷なる瞬間に許多の生命財産を盪盡せり。然り而して本縣沿岸各町村の慘害は實に名狀すべからず。本所在地近傍に於ても亦慘毒を蒙らざる所なく其の甚しきは全村流亡せし所あり。

其他被害の狀況を一々記すれば枚擧に遑あらず。又其の悽愴たる有様は殆んど形容に辭なく唯酸鼻と云ふ外なきなり。而して斯の如き慘狀を呈せし首なる地方に於ても被害の度に輕重ありて本所々在地の如きは割合に少き方にて此等は他に一、二の理由あれども概ね港灣の地形に關するものゝ如し。古來より太平洋沿岸地方は海嘯の害は免れざるものゝ如し。

而して未だ舊記を調査するの暇なきを以て當地方のものに於ては未だ明瞭ならずと雖も去今二百八十年前元和二年(月日不明)に大海嘯ありしと。又四十年前安政三年七月二十三日(陰曆)正午頃に起りしものは所に依り(青森八戸地方は甚しかりし由)被害を蒙りしも這回の海嘯に及ばざること遙かに遠く尤も地震は強く且つ頻繁なりしと云へり。今這般の海嘯に就き本所に於て觀測調査せし要領は左の如し。

海嘯の現象及其原因

今般の大海嘯の起始は(海水の始めて退減し始めし時刻)夜間のことゆへ精測し能はざれども凡そ午後七時五十分頃にして最初の地震後約十八分を経たるなるべし。其後十分時間を過ぎ午後八時頃増水し霎時にして稍々退減し同八時七分に至り最大劇烈なるもの轟々遠雷の如き響をなして襲來し爾後八時十五分、八時三十二分、八時四十八分、八時五十九分、九時十六分及九時五十分の六回著しき増水ありしも勢力は漸次減殺せり。

而して一大慘狀を呈せしは第二回目の激浪にして忽諸の間に幾多の生命財産を一掃し去れり。爾後翌十六日正午頃までは槩に海水の増減ありしも頗る輕少にして精密の觀測をなさざれば

知るべからず。

又其著明なる増減は往復八回其の往復振動期は約十分内外にして最大波浪は灣内に於て約一丈五六尺なりし。

元來津浪を起す原因に二種あり、暴風及地震是なり。

而して海嘯當時の氣象を通觀するに連日高氣壓は大平洋に低氣壓は日本海方面に擴張且つ其差は僅少にして暴風の兆候なく、又當時の地震に依り 觀察するも其原因は暴風にあらずして全く地震津浪なりしことは明瞭なり。

抑震源の海中若くは海岸にありて強き震動を發起するときは海水に激動を興へ水震(所謂津浪)を起し時としては沿海に非常の災害を及すことありて即ち這回の如き現象を發生するものなれば海中大震ありしは疑ひなきものゝ如し。

海嘯前後の地震及震原

當地方は平常地震多き方にあらず、本所創業以來の觀測に據れば平均一年間に十五回なれども二十七年及二十八年は平年より二倍餘の多震にして即ち二七年とも三十二回を觀測せり。而して斯く震數の増加せしは二十七年三月二十二日根室地方に於ける大震の餘波を蒙り所謂餘震(俗に揺り返しと名づくるもの)に關係するやも圖られざれども亦這回の災害を起す原因な

りしやも知るべからず。

尙ほ本年一月以來概ね平均以上の多震にして就中四月に至り十六回なる非常の震數を示せり。

是或は今回の前兆にあらざるか兎に角異例の現象を呈せり。

爾後は別に異狀なかりしが六月十五日午後七時三十二分三十秒に至つて稍々弱震し殆んど東西の方向を以て五分間水平に震動し頗る緩慢なりし。次で同七時五十三分三十秒に微震し爾後頗る繁續震し八時より九時の間に四回、九時より十時の間に四回、十時より十一時の間に一回、十一時より夜半までに二回の微震ありて計十三回を觀測し、翌十六日は十三回、十七日十二回、十八日は六回、十九日は二回、二十日は四回、二十一日は一回、二十二日は三回、二十三日、四日は各一回、二十五日は三回の微震ありしも就中微震最も多く又上下動は甚だ稀なり。

上來述ぶる所に依て觀るも這般の災變は地震津浪なること明瞭なり、然り而して震原は何處なるやは未だ十分材料を得ざれば推算し能はざれども、概ね海岸を去る三十里乃至三十五里邊にありしものゝ如く、即ち本所に於て觀測せし結果並に一昨年根室大震の際本所に影響せし地震津浪等の成績に依て概算を施すときは、本所より東南東に方り大凡東經百四十五度、北緯三

十九度邊に震央ありしものゝ如く尙地震の性質及タスカロラ海溝の關係等より觀察を下すときは根室大震の時の如く地亡なりしやも知るべからず。

海嘯前後の氣象

氣候と地震と相關係するとは往昔より人の唱ふる所なれども是等の關係をして明瞭ならしむるは容易のことにあらず。然れども今試みに本所に於て從來觀測せし結果に依り調査せし大要を叙し參考に供せん。

氣壓は昨二十八年に於ては多少の高低こそあれ粗ぼ平年に均しき曲線を示せしが一月より四月までは稍々不規則の昇降をなせり。而して本年一月に至り非常に低壓(七百五十四耗にして平年より低きこと三耗六)を示し、二月は急昇して七百六十一耗三の最高を示し平年より二耗四高く爾後は一耗乃至二耗の高壓なりし。

溫度は昨年及本年とも概ね高溫の方に於て二十八年は一月、三月、六月、七月、八月、及十一月は稍々低溫なりしも其他の各月は高溫なりし。本年は三月に低溫にして其他は高溫なりし。濕度は二十八年に於て三月及八月は僅に多濕に七月は平年に等しく其他の各月は多少の差こそあれ孰れも乾燥なりし。而し

て本年は二月の多濕を除き孰れも乾燥の儘なりし。

雨量は二十八年一月は少量に二月は多量にして三月以後再び少量なりしが七月に至り二百五十耗以上の多量なりし、爾後一多一少にして不規則なりしも概ね上半年は少量に下半年は多量なりし、而して本年は二月に於て殆んど二百耗近き多量の降雨ありしのみにて其他は孰れも平年よりも少量なりし。

更に本月十五日前後十日間の氣象を調査するに氣壓に於ては八日及十日は殆んど平年に均しく九日は平年以下にあり、爾後十八日まで孰れも高壓なり、而して變災後三日目即ち十七日より急降し十九日は平年以下の度を示し二十一日最低七百四十六耗七(十九日午前六時低部位朝鮮海峽を占領し海上不穩の虞ありしが此低氣壓漸次北東方に進行して二十一日頃は本州北部を占領せしを以て斯の如く低下せしならん)に達し夫より上昇して二十三日に至り平年以上に昇れり。

溫度は五日及六日に殆んど同度なりしが爾後多少の差あれども高溫にして二十一日に至り漸く平年に近似せり。濕度は五、六の兩日は多濕なりしが七日より十度以上の乾燥にして十五、十六の兩日は再び多濕となり爾後は甚しき差異なかりし。雨量は五日より十三日まででは寡雨にして十四日及十五日は平

年より多く十六日に至り寡少となりしも二十一日の多雨を除きては格別の差異なかりし。

之れを要するに氣壓氣温は共に高位を占め且つ乾燥乏雨の候なりし、殊に變災前は變化著しくして爾後は稍々平常に復せし感あり、然れども前に述べあるが如く此等の關係をして明瞭ならしむるは緻密の調査をなさざれば俄かに言明し能はず、暫く茲に大要を記するのみ。

彙報

管内各郡役所よりの地震報告中未達の箇所あれども孰れも當時各所に數回の微震ありて過半南東、北西若くは東、西の水平動なり、而して膽澤郡水澤町に於ては大砲の如き音響三回ありしと、又二戸郡福岡町に於ては震動後十分を経て戸外通車のきしるが如き聲響を聞きしが夫より六分を過ぎて忽然頭上迅雷の轟くを遠きに聞くが如き響あり、前後共其方位にありしが如しと報ぜり。翌十六日も引續き各所に微弱震動あり稀には強震を報ぜり、今本所に達せし臨時報告を摘記すれば左の如し。

海嘯臨時報告

二十九年六月十六日午後八時四十五分發本所宛

南北九戸郡役所

(電報)昨夜午後九時門前、野田村、中野字小内原字内は九分通り、

同 上六月二十七日付

南北九戸郡役所

(摘要)去十五日午後七時頃より微震數回濃霧濛濛同七時三十分頃に至り幽に鳴動する二三回、同八時二十分頃砲聲の如きもの二三回を聞くと共に百雷一時に轟くが如き凄き音響と共に數丈の波浪襲來し忽ち人畜家を捲き去り沿海は何れも高所なる山麓を浸襲破壊せり、而して全く退潮せしは同八時三十分内外ならん云云。

山形測候所員よりの通信に據れば當日同所にも地震あり、且遠雷の如き響を聞き或は近縣に大地震にてもあらざりしやを疑

本縣管内海嘯被害概數取調一覽表

郡	町村名	人口	死亡數	負傷數	戸數	流失家屋
氣	氣仙村	三六五一	一四	一〇	五六九	三五
	高田村	三四八九	三〇	三八	六一六	一一
	米崎村	二四六〇	三二	三六	三五〇	一一
	小友村	二五一九	一四	六六	三八一	一一
	廣田村	三一〇二	二二	九八	四六九	一三
	未崎村	二九六五	九六	五〇	四〇〇	五九
	大舟渡村	二三〇四	八三	八九	三〇六	七七
	赤崎村	二九八五	五〇	六九	三八九	一三
	綾里村	二八〇三	三三	九五	四五一	二九
	越喜來村	二四四九	八〇	五八	三二二	二〇
吉濱村	一〇七五	九八	五七	一三三	七〇	

侍濱、種市、夏井、長内の一部流失死傷多し。

同 上六月十八日午前十一時三十五分發本所宛

氣仙郡役所

(電報)十五日午後九時津浪本郡内流失凡一千四百戸死亡凡七千人慘狀極りなし盛町無事。

同 上六月二十日付

西南閉伊郡役所

(摘要)本月十五日午後八時三十分前後地震あり爲めに海水激騰大海嘯を起し其高さ五丈餘沿岸を襲來するの音響恰も雷鳴の如し、忽ち沿岸の家屋を浸するもの數里に互り人命財産を蕩盡すること無算云々。

同 上六月二十三日附

氣仙郡役所

(摘要)本月十五日午後四時驟雨後ち細雨となり同九時に垂とし南東方に發砲の如き音引續き三度あり(盛市街中には心付かざりしもの多し)、沿海魚村に於ては皆軍艦の發砲とのみ思ひしに暫時にして猛烈なる海嘯襲來、時既に午後九時過暗夜咫尺を辨せず概ね避難に違なく家屋と共に掃蕩せられ其内水練に達し或は僥倖にも波に打揚げられたる等九死に一生を得たるものも岩石木竹に觸れ多少の疵を被らざるなく海嘯の稍々鎮靜するに至るまでの間は凡そ一時間、天明被害の狀況を一見すれば港灣の位置地勢の廣狭により一様ならざれども概ね洋中に突出し且つ大洋に面せる部分に被害多く波浪の最高は凡そ水面より百尺の高處に達し最低と雖も三十尺に下らず、大樹を抜き山を崩し家屋倉庫粉砕して留どめしもの少なく木材家具等海濱に散亂し或は洋中に漂流せるもの多く、又陸上各所に散見する所の死屍は腦を破り骨を碎き皮膚を傷り腸を露し其慘怛たる景況は克く言語の盡す所にあらず云云。

へりと。又根室測候所員よりも微震且つ小津浪ありしを通報せり。

當時海上にありし當地方の漁者の説には別段異狀なかりしと云へるもの多し、尤も稀には潮流急なりしを唱ふるものもありし、其他井水の減量水温の昇降等種々の説を唱ふるものあれども未だ俄かに信憑し難きを以て省略しぬ。但し被害の一斑を知らしめん爲め本縣管内に於ける被害の概表を附す。

明治二十九年六月

岩手縣 宮古測候所

久慈町	郡 伊 閉 下										郡 伊 閉 上			唐丹村			
	普野村	田畑村	小本村	田老村	崎山村	宮古町	鉾ヶ崎村	磯鷲村	津輕石村	重茂村	大澤村	山田町	織笠村		船越村	大槌町	釜石町
四〇九二	三五四八二	二〇三八	三〇二五	二〇九〇	三七四七	九八二	五一五七	三四五九	一九九六	二六一八	一四九三	一〇三六	三七四六	二二九五	一八〇〇	一六二五九	二八〇七
四〇〇	七五五四	一〇一〇	九八	三六七	一四〇〇	九〇	一二	一〇〇	一〇二八	四九六	五〇〇	五〇〇	二〇〇	一二五〇	六九六九	六七四八	三二八
一九〇	三八四九	八六	四五	二五七	一三四〇	五四	四三	三三	一	五八八	三三	四一九	二〇〇	七〇一	一四一四	七〇八	七八
六五七	六四八九	三三〇	四六五	三八六	六六六	一五五	九九三	七〇一	三六五	四三四	二二六	一九九	七八二	四七四	二九二六	四八六〇	四七四
一〇〇	二八三二	二五八	三二五	三三〇	二三〇	一〇〇	二〇	二五〇	一八	二二一	一〇三	一九三	六六〇	一〇四	一四六五	一四三五	一二九

合計	郡 戸 九				
	種市村	中野村	傳濱村	長内村	野田村
一〇三七七二	一九四二二	四六八五	一六九五	一三九七	二二四四
二二五六五	一二九四	一〇〇	一五一	一〇〇	一六〇
六七七九	八〇八	九一	七八	一七九	六九
一七二一一	二九三六	六五五	二二八	一八五	三二八
六一五六	四二四	三〇	五三	五〇	四八

明治二十九年六月十五日宮古の氣象

時刻	種目	氣壓	風		氣温	水蒸氣張力	湿度	雲量	降水量	記	事
			方向	速度							
午前二時	七五、二	靜穩	〇、二	一八、三	一五、三	九六	一〇	三、六	降水斷續午前〇時五分止む		
午前六時	七五、三	北々東	〇、七	一四、九	二、四	九九	一〇	〇、三	濃霧發生午前五時より降雨		
午前十時	七五、〇	靜穩	〇、二	一七、六	一三、二	八九	一〇	〇、一	濃霧あり午前六時半雨止む		
午後二時	七五、三	北	一、五	一八、八	一三、六	八五	一〇	〇、〇	濃霧あり午後一時より降雨		
午後六時	七五、五	北々西	〇、七	一六、三	一三、三	九六	一〇	一、七	引續き降雨		
午後十時	七五、七	靜穩	〇、三	一五、七	一二、八	九六	一〇	四、〇	午後六時二十六分雨止む微震十		
平均	七五、八		〇、七	一六、七	一三、四	九三、八	一〇	八、六	同ありたり		

備考 六月十五日午後七時三十二分二十三秒弱震起り(緩慢なる東西動)約五分間震動し次で同七時五十三分三十秒に微震し爾後頻繁に續震し

八時より九時の間に四回、九時より十時の間に四回、十時より十一時の間に一回十一時より夜半までに二回の微震ありて計十三回を觀測せ

り。翌十六日は十三回、十七日は十二回、十八日は六回、十九日は二回、二十日は四回、二十一日は一回、二十二日は三回、二十三、二十四日は各一回、二十五日は三回の微震ありしも就中微震最も多く又上下動は甚だ稀なりし。

織笠村住民會建立從三位伯爵南部利恭題字

明治廿九年六月十五日自朝冥濛山岳盡韜形及夜地震而以其搖不劇且此日當陰歷五々陶醉端午之酒人多不警無幾海上鳴動忽濁浪起于前崩山拔樹到屋潰夫蕩夷黎元無孑遺如此者北從陸奧白銀濱南至陸前志津川溺死者三萬死屍累々拾收踰月事

達 上聞 上

震悼即派侍從撫恤災民内外志士爭脫衣贈金弔慰莫不至有司亦日夜奔走致力于救助災餘之民賴以免流離之難矣我織笠村瀨昂丈餘及坊主山下溺死七十二流屋五十六船舶五十六牛馬倉庫數十橋梁二水田十六町陸田六町宅地六町悉屬荒廢嗟人世之無常變災之不可測如此豈可不恐而警哉今茲當三週年建石以勒焉 明治三十一年六月

海嘯記念碑

恰當端午佳節家々醉祝酒之日突如而來忽現出阿鼻叫喚修羅巷明治二十九年六月十五日之海嘯豈夫不無殘乎今概記光景此日陰雲

暗憚時々雨至於薄暮感弱震數回後遙聞如殷々遠雷異響人皆恠之偶數丈洪濤宛如疾風激來迨兩回破碎家屋斃人畜頗極慘矣本村其害最甚者為高濱金濱二區及磯鷄區內石崎飛鳥方白濱四所流失家屋百廿一戶死者九十六名海嘯區域南自陸前石卷北至陸奧北郡奪生靈殆三萬可謂極悲慘矣今茲丁七年忌為紀念磯鷄區民一同及愛友團員相謀建碑以傳後昆云爾

磯鷄區

明治三十五年五月 橫死者 男廿七人 女三十一人
流失家屋 五十三戶 半潰十戶

明治廿九年六月十五日當陰曆端午此日自朝濃霧濛々覆山海間隔不別皂白及黃昏地震再回而其搖水平動稍緩慢不敢警無幾海上遙聞如炮聲異響人皆恠之忽數丈洪濤如疾風襲來續迨三回二次最激甚破碎家屋斃人畜頗極慘劇如此者北從陸奧泊南至陸前志津川溺死者殆三萬流失家屋舉不可數我欽々崎町死者 流屋 船舶 洵可謂極悲慘本嘗於學校有幻燈會兒童及父兄等參觀者多數僥倖免難矣嗟呼人世之無常變災之不可測夫如此豈不可恐而警哉今茲當十三年忌建碑勒焉以傳後昆云爾

昭和八年八月二十日印刷
昭和八年八月二十五日發行

(非賣品)

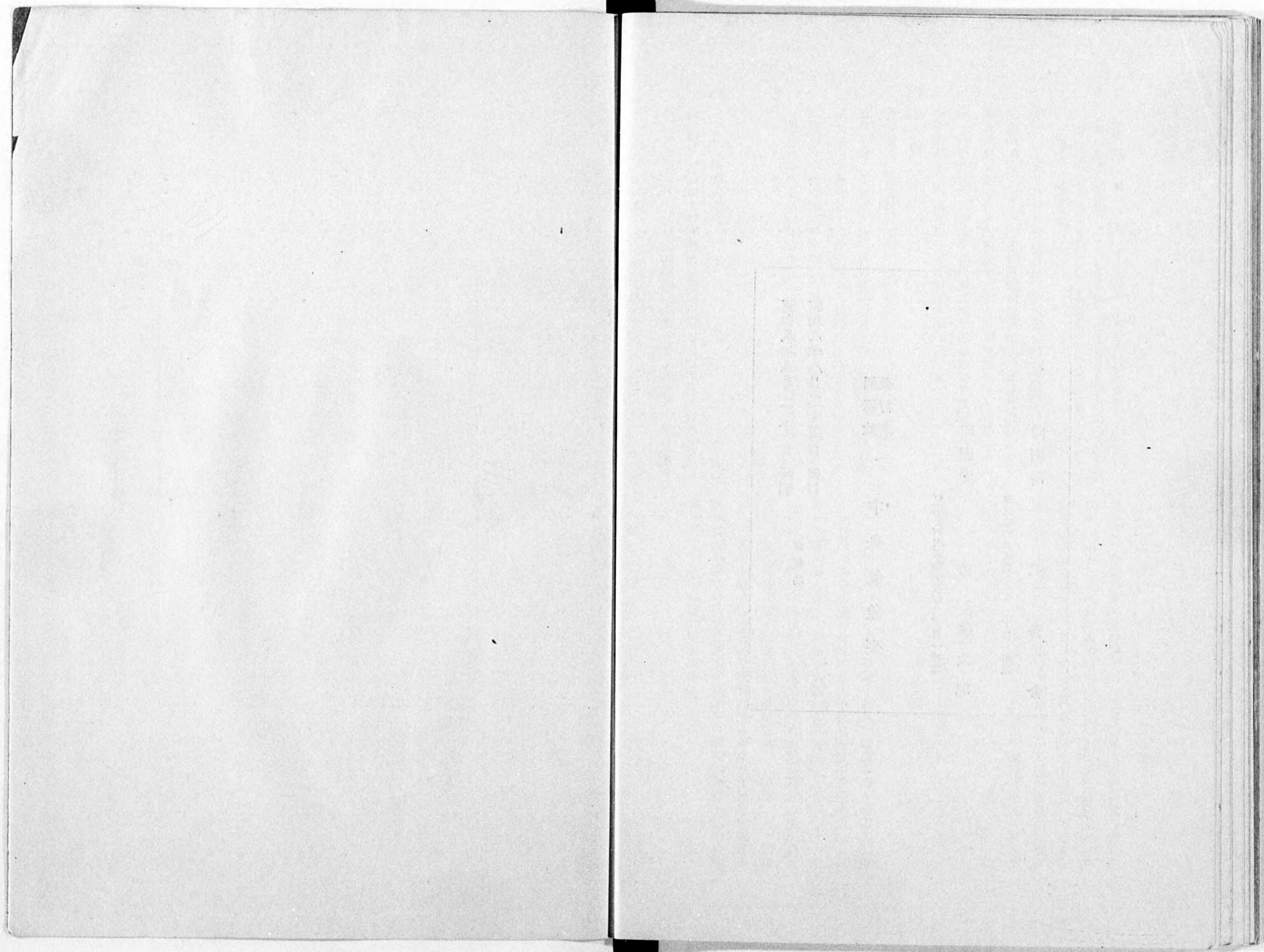
編輯兼 中央氣象臺
發行者

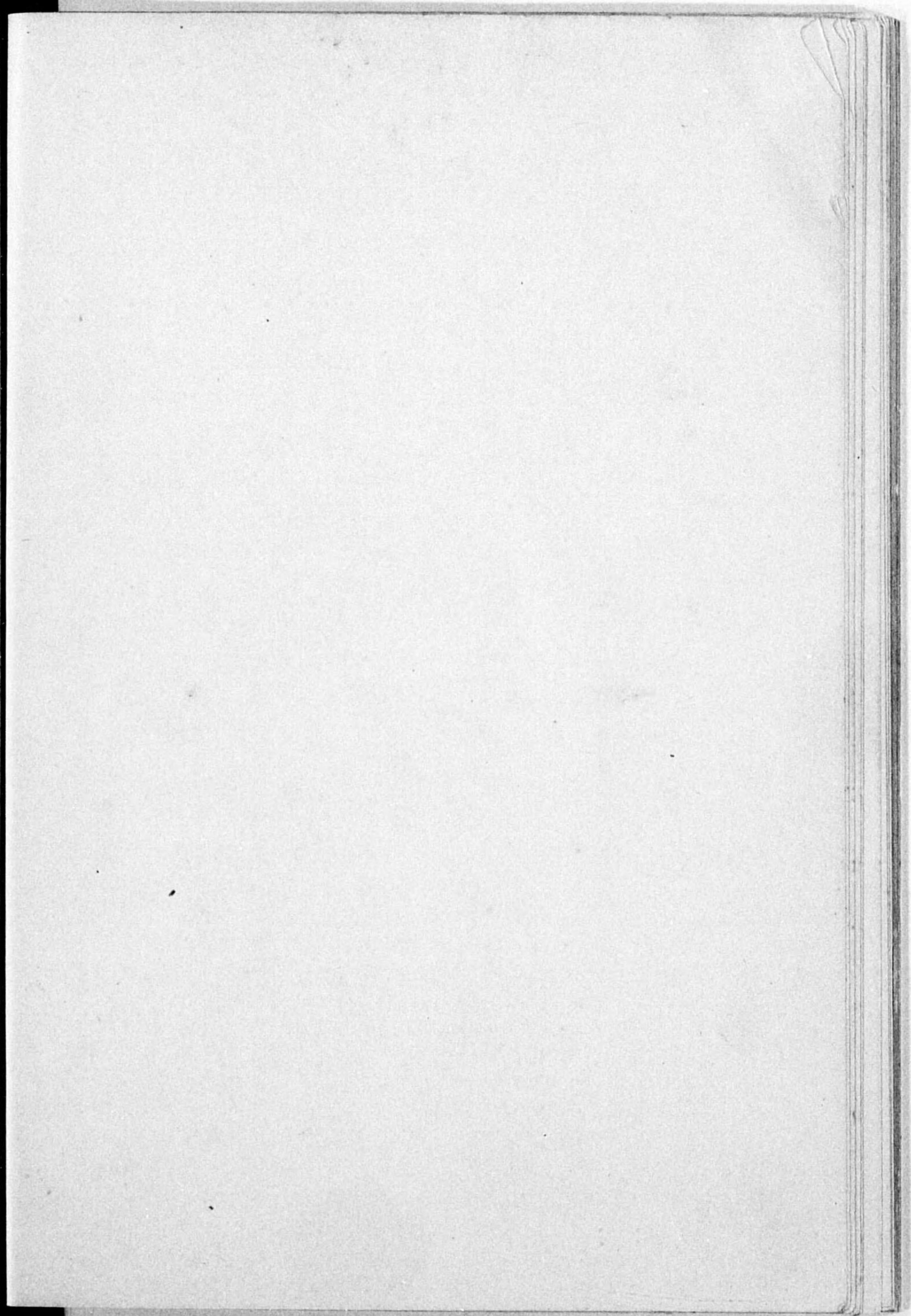
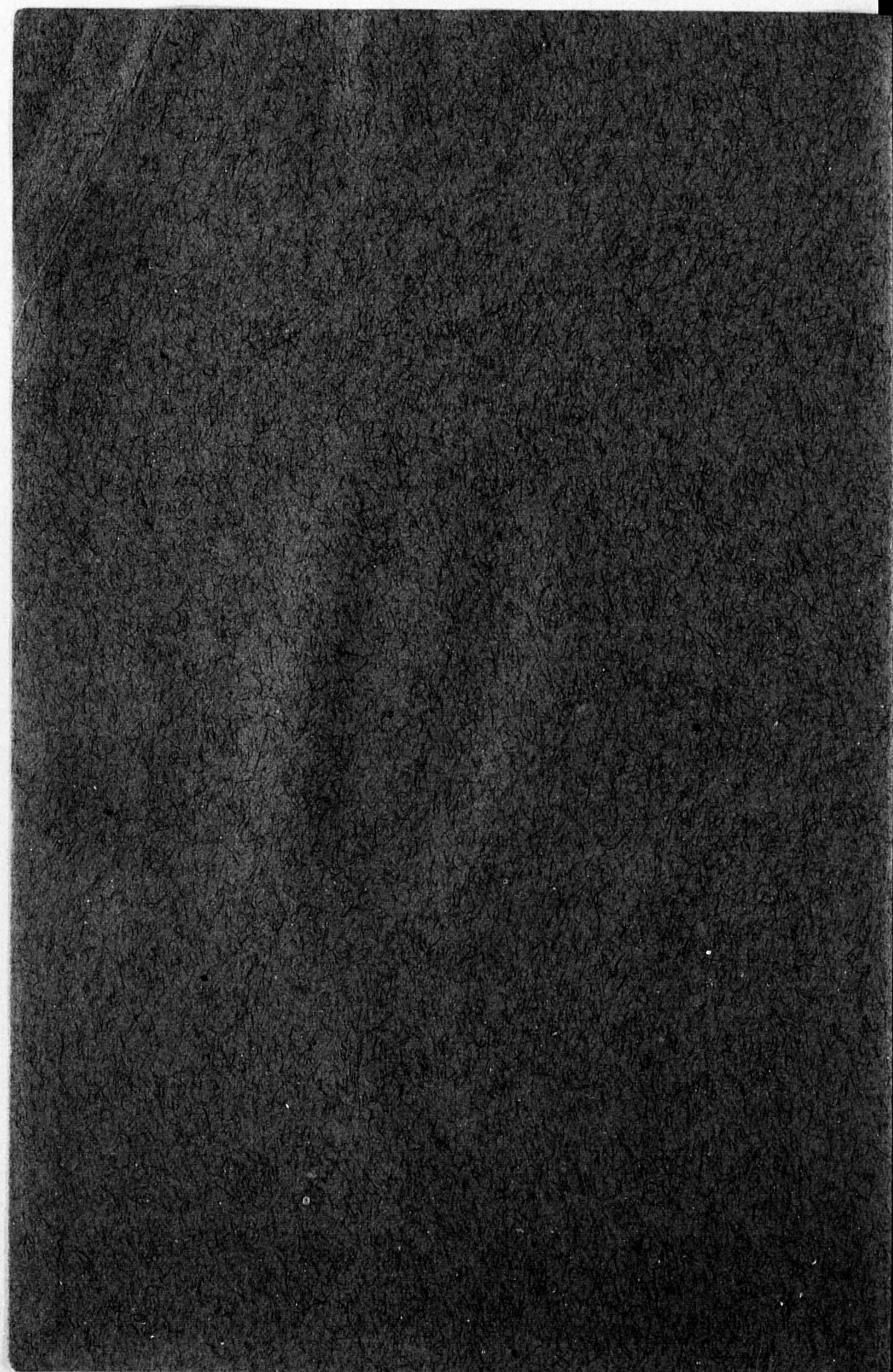
印刷者 東京市神田區美土代町二丁目一番地

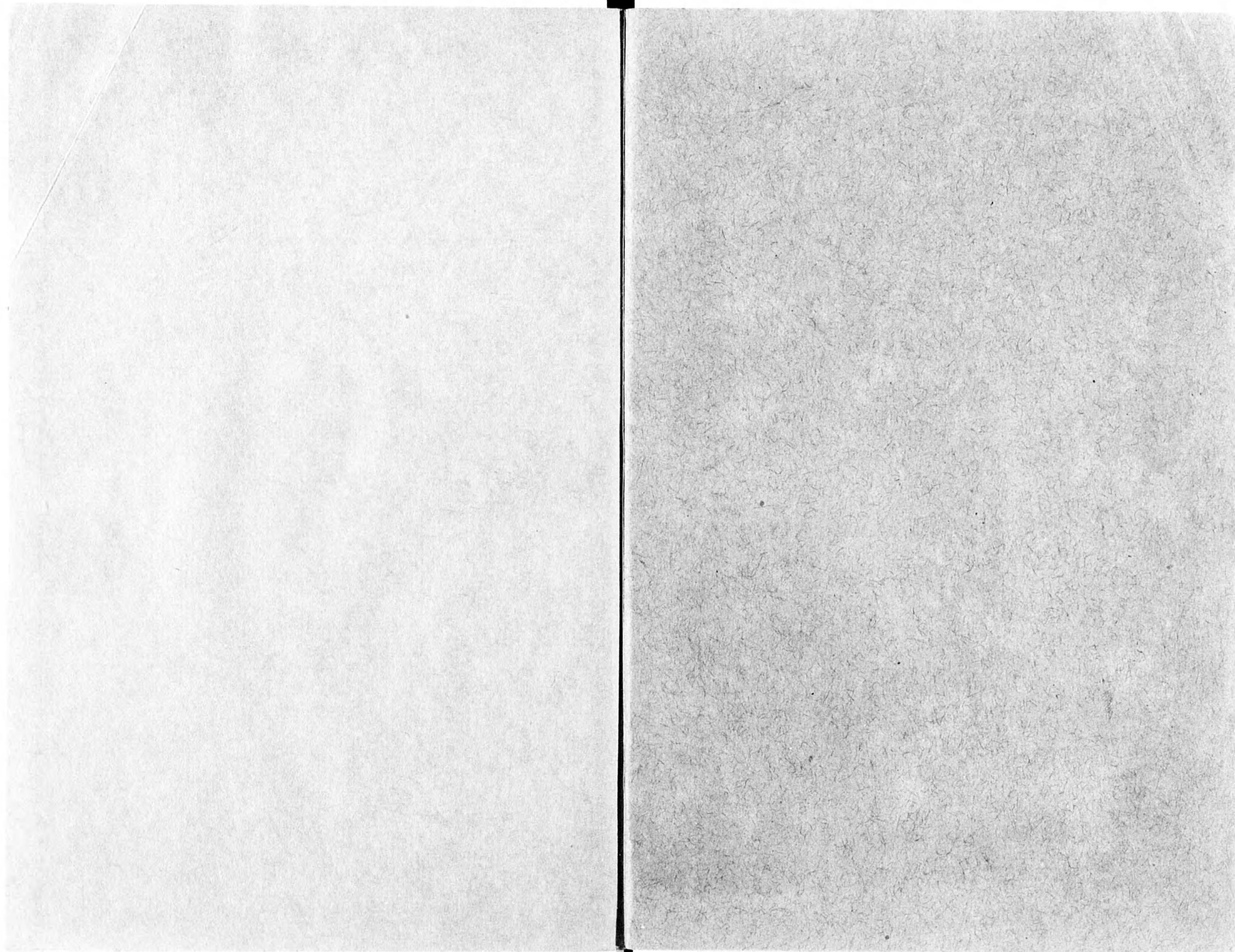
印刷者 島 連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三 秀 舍







14.6
330

終